

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集

筒畠遺跡群 I KE HA TA
池 畑

猫久保遺跡群 NI SHI MI DO
西 御 堂

長野県佐久市安原池畠・西御堂遺跡発掘調査報告書

1986

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

序 文

国の高速自動車道整備計画に基づき、佐久建設事務所が、安原地籍に於いて行う関越自動車道上越線建設に関する県道香坂中込線バイパス改良事業に伴い、同地籍の池畠・西御堂両遺跡の緊急発掘調査が市教育委員会の委託・指導により、佐久埋蔵文化財調査センターで実施し、地元関係者を始め多くの皆様のご協力とご努力により、昭和60年12月24日現地調査が終了いたしました。おかげさまで本調査報告書にみられますように佐久地方の古代史解明に貴重な記録を残すことが出来ました。

現在、佐久市には文化遺産である多数の遺跡が存在し、これらは現代に生きる私達に、佐久市の古代の歴史を教えてくれるものであります。

私達は、この文化遺産の重要性を認識し、先人の遺業を偲ぶとともに、後世に伝達し将来への進展を期すべきであろうと思います。高速交通網時代を迎へ、急速な開発が見込まれる現在、市民生活の向上を計り、歴史的文化を尊重し、均衡のある発展と開発を柱に、めざす都市像実現に努力して参りたいと考えております。

尚、本発掘調査に対しまして多大なご甚力を賜わりました黒岩忠男団長を始めとする調査団の皆様、地元関係者の皆様のご労苦、また遺物鑑定にあたっては群馬県立前橋第二高等学校の宮崎重雄先生のご協力に対し深く感謝を申し上げ厚く御礼を申し上げます。

昭和61年3月

佐久市長

佐久市開発公社理事長 神津 武士

例 言

1 本書は、長野県佐久市県道香坂中込線バイパス改良工事事業（高速道路関連工事専用道路）に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 佐久建設事務所

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地番

筒 烟遺跡群 池 烟遺跡 佐久市大字安原字池筒 717-1, 719-1・2, 720-1

猫久保遺跡群 西御堂遺跡 佐久市大字安原字西御堂 962-1・3, 966-2・3

5 調査期間及び面積

池 烟遺跡 昭和60年11月15日～12月24日・昭和61年1月6日～3月31日 1200m²

西御堂遺跡 昭和60年11月28日～12月14日・昭和61年1月6日～3月31日 480m²

6 調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 木内 捷

庶務係主任 崎山 俊彦

庶務係 高橋 純子

調査団

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 林 幸彦 (佐久市教育委員会)

調査担当者 高村 博文 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任)

調査主任 三石 宗一 (同 上 調査係)

調査副主任 小山 岳夫 (同 上 調査係)

調査員 井上 行雄、大井 今朝太、羽田伸博 (以上佐久考古学会員)。

発掘調査協力者

(五十音順) 青木しま子、浅沼ノブ江、遠藤しづか、土屋福男、角田芳通、内藤治伸、中沢まさ江、並木ことみ、橋詰信子、細萱ミスズ、森泉好治(佐久考古学会員)、谷津高子、和久井義雄(佐久考古学会員)。

整理調査協力者

(五十音順) 駒村英明、榎原浩江、土屋武徳、羽田卓也、橋詰信子、平林美津江、

細萱ミスズ、木内一徳（小諸高校生）。

獸骨鑑定 宮崎重雄（群馬県立前橋第二高校教諭）

地形・地質・石質指導 白倉盛男（佐久考古学会副会長）

遺物写真 畠山俊彦

7 本書の編集は、高村、三石、羽毛田が行い、執筆は第II章第1節佐久市安原附近の自然環境を白倉が、第2節遺跡の歴史的環境を黒岩が担当し、他の章については、三石宗一、羽毛田伸博がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。

8 本書及び池畠遺跡・西御堂遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、安原区長谷津延氏、堀籠常人氏、中島良夫氏をはじめ地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

岩崎卓也、伊藤敏行、及川良彦、桐原健、笠沢浩、堤隆、花岡弘、比田井克仁、丸山謙司、
村田健二
(敬称略、五十音順)

凡 例

- 1 本書は、筒畠遺跡群池畠遺跡と猪久保遺跡群西御堂遺跡についての報告であるが、各遺跡の遺構・遺物の記述は、それぞれ第IV章池畠遺跡の遺構と遺物、第V章西御堂遺跡の遺構と遺物に分け、第I章発掘調査の経緯・第II章遺跡の立地と環境・第III章基本層序及び概要・第VI章調査のまとめは、両遺跡の内容を併せて記述した。
- 2 垂穴住居址（以下、本文中においても特別の場合を除いて住居址とする。）の記述について
は、検出位置の検出層序の重複関係の平面形態の覆土の壁（壁溝を含む）の床面の柱穴の炉（位置→残存状況→平面形態→層位→構材→その他）のその他の付属施設の遺物出土状況のその他の観察事項の順に記載し、他の遺構についても、基本的に住居址の記載順序を踏襲した。
- 3 遺構の略称
垂穴住居址の住、土坑のD、溝状遺構のM
- 4 水糸レベルについては、各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。
- 5 採図
 - 1) 重複遺構については、上端のみを実線で表示した。
 - 2) 縮尺
垂穴住居址・溝状遺構→1/80 炉→1/30 土器→1/4
写真図版中の土器の縮尺についても、上記に準拠する。
 - 3) 遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーンは、下記の内容の表現である。

遺構実測図



遺物実測図



- 6 第4章第2節中で用いた馬骨No.1、No.2……No.5は、付編中における1号馬、2号馬……5号馬を表わす。

目 次

序 文
例 言
凡 例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機.....1

第2節 調査日誌.....2

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 佐久市安原附近の自然環境（地形と地質）.....3

第2節 遺跡の歴史的環境.....5

第Ⅲ章 基本層序及び概要

第1節 基本層序.....8

第2節 検出遺構・遺物の概要.....10

第Ⅳ章 池畑遺跡の遺構と遺物

第1節 堅穴住居址.....15

1) 第1号住居址.....15

2) 第2号住居址.....21

第2節 土 坑.....31

1) 第1号土坑.....31

第3節 溝状遺構.....39

1) 第1号溝状遺構.....39

2) 第2号溝状遺構.....40

第4節 耕作土及び表採遺物について.....41

第Ⅴ章 西御堂遺跡の遺構と遺物

第1節 土 坑.....42

第Ⅵ章 調査のまとめ

第1節 遺 構.....44

第2節 遺 物.....46

引用参考文献

付 編 長野県佐久市池畑遺跡出土の馬と牛の骨について

後記

写真図版

挿図目次

第1図 池畠・西御堂遺跡の位置	1
第2図 本遺跡地南より平尾山・浅間山を望む	3
第3図 鼻顔稻荷社北の湯川断崖	4
第4図 周辺遺跡分布図	6
第5図 池畠遺跡基本層序模式図	9
第6図 西御堂遺跡基本層序模式図	9
第7図 池畠・西御堂遺跡の地形及び発掘区設定図	11
第8図 池畠・西御堂遺跡遺構全体図	13
池畠遺跡	
第9図 第1号住居址実測図	16
第10図 第1号住居址炉址実測図	17
第11図 第1号住居址出土遺物分布図	18
第12図 第1号住居址出土土器実測図及び拓影図	19
第13図 第1号住居址出土石器実測図	19
第14図 第1・2号住居址間接合関係関連図	20
第15図 第1・2号住居址出土壺形土器実測図	20
第16図 第2号住居址実測図	22
第17図 第2号住居址炉址実測図	23
第18図 第2号住居址遺物出土状況実測図	23
第19図 第2号住居址遺物分布及び接合関係図	25
第20図 第2号住居址出土土器実測図〈1〉	27
第21図 第2号住居址出土土器実測図〈2〉	28
第22図 第2号住居址出土土器拓影図及び石器・土製品実測図	29
第23図 第1号土坑実測図	31
第24図 第1号土坑遺物出土状況実測図	33
第25図 第1号土坑遺物分布及び接合関係図	35
第26図 第1号土坑出土土器実測図	37

第27図 第1号溝状遺構実測図	39
第28図 第2号溝状遺構実測図	40
第29図 耕作土出土石器実測図	41

西御堂遺跡

第30図 第1号土坑実測図	42
第31図 第2号土坑実測図	42

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7
第2表 第1号住居址出土土器觀察表	21
第3表 第2号住居址出土土器觀察表	30
第4表 第1号土坑出土牛馬骨一覧表	36
第5表 第1号土坑出土土器觀察表	38
第6表 池畠遺跡住居址一覧表	45
付 編	
第1表 馬全臼歯列長計測値一覧表	55
第2表 馬臼歯計測値一覧表	56
第3表 馬乳臼歯計測値一覧表	57
第4表 馬切歯計測値一覧表	57
第5表 家牛全臼歯列長計測値一覧表	57
第6表 家牛臼歯計測値一覧表	57
第7表 家牛下頸骨計測値一覧表	58
第8表 家牛中足骨計測値一覧表	58
第9表 家牛踵骨計測値一覧表	59
第10表 家牛基節骨計測値一覧表	59
第11表 家牛距骨計測値一覧表	59

写 真 図 版 目 次

図版一 筒畠遺跡群・猫久保遺跡群付近航空写真

図版二 1 池畠遺跡遠景

- 2 池畠遺跡より平尾山を望む
- 國版三 1 第1号住居址
2 第1号住居址炉址
3~5 第1号住居址遺物出土状況
- 國版四 1 第2号住居址
2~5 第2号住居址遺物出土状況
- 國版五 1・2 第2号住居址遺物出土状況
3 第2号住居址炉址断面
4 第2号住居址炉址
5 第2号住居址
- 國版六 1 第1・2号住居址
2 第1号溝状遺構
3 第2号溝状遺構
- 國版七 1・2 第1号土坑牛馬骨出土状況
- 國版八 1~4 第1号土坑遺物出土状況
5 第1号土坑
- 國版九 1・2 池畠遺跡全景
- 國版十 1 西御堂遺跡遠景
2 西御堂遺跡全景
3 第1号土坑
4 第2号土坑
- 國版十一 1~6 第1号住居址出土土器
7 第1・2号住居址出土壺形土器
- 國版十二 1・2 第2号住居址出土土器
- 國版十三 1~6 第2号住居址出土土器
- 國版十四 1~7 第2号住居址出土土器
- 國版十五 1~3 第1号土坑出土土器
- 國版十六 1 第1号土坑出土土器
2 第1号住居址出土石器
3 第2号住居址出土石器・土製品
4 第1号土坑出土牛馬骨

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

池畑遺跡は、佐久市安原地籍の浅間山麓の火山堆積物による平地がいくつかの田切りによって区切られた標高710m内外の南北に細長い台地上に位置する。西御堂遺跡は、その台地から約300m西方の同様な台地に所在し、西側に流れている安原用水と境をなしている。隣接して西方に蛇塚A・蛇塚B遺跡群、東方に安原大塚古墳などが存在する。

今回、佐久建設事務所が行う県道香坂中込線バイパス改良工事事業（高速道路関連工事専用道路）に伴い、昭和59年11月16日、現地にて長野県教育委員会文化課・佐久建設事務所・佐久市教育委員会の三者で協議を行った。その結果、遺跡の破壊を余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存の必要性が生じた。そこで、佐久市教育委員会が佐久建設事務所より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 池畑・西御堂遺跡の位置 (1:50,000 國土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

11月15日（金）・16日（土）	プラン確認作業を行う。
機材の搬入・整備、テント設営	
11月18日（月）～21日（木）	池畠遺跡
池畠遺跡	掘り下げ作業はほぼ終了し、実測作業・写真撮影を行う。遺構全体図作成を行う。
調査区西側より重機により表土削平作業を行い、併行してプラン確認作業を行う。	
11月25日（月）～27日（水）	12月7日（土）
池畠遺跡	池畠遺跡
プラン確認作業により検出された遺構の掘り下げ作業を行う。	実測作業・写真撮影を行い、第1号土坑を残し、住居址・溝状遺構は終了する。
グリッド設定を行う。グリッドは8m×8mとするが、調査区の幅が10mとせまいため、基準となる東西ラインのみトランシットを用いて設定する。	西御堂遺跡
11月28日（木）・29日（金）	プラン確認作業により検出された土坑の掘り下げ・実測作業・写真撮影、全体図作成を行う。
池畠遺跡	12月13日（金）・14日（土）
遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行う。	西御堂遺跡
西御堂遺跡	遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影、埋め戻し作業を行い、西御堂遺跡の全調査を終了する。
調査区西側より重機により表土削平作業を行い、併行してプラン確認作業を行う。	12月19日（木）～24日（火）
11月30日（土）～12月2日（月）	池畠遺跡
池畠遺跡	第1号土坑の掘り下げ・実測作業・写真撮影、機材の撤収を行い、池畠遺跡の全調査を終了する。
遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行う。	昭和61年1月6日（月）～3月31日（月）
12月3日（火）・4日（水）	池畠・西御堂遺跡
池畠遺跡	室内において、報告書作成作業を行い、両遺跡のすべての調査を完了する。
遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行う。	
西御堂遺跡	（三石）

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 佐久市安原附近の自然環境（地形と地質）

I 地形

上信国境に聳ゆる浅間山は標高2560m、わが国の代表的な活火山で常時火山活動状況を観測する施設を有する数少ないA級火山に分類されている。浅間火山は溶岩流・火山弾・火山砂・浮石・火山灰などの火山噴出物が互層する成層火山で、現在の最高地点噴火口は黒斑火山・前掛火山の上部中心に形成されたもので、これらを含めて浅間山全体は模式的な三重式成層火山である。

この浅間山は古くから親しまれ、恐れられ佐久地域には特に自然・歴史人類生活の上に偉大な影響を及ぼしてきたが、現在では火山・地震等の地球物理学上から、日本だけでなく、世界的にも広く知られてきている。その理由は次の三点に要約できる。

- ① 活火山浅間山は地形・地質構造・火山活動・火山形態（成層・楯状・溶岩円頂丘等）などの各面から各種の火山としての条件を兼備しており、火山の模型的存在で、火山研究には最も適しており興味深いものがある。
- ② 古代からの噴火活動の古記録が残されており、火山活動の歴史的研究では世界的に珍しいとされている。ことに天明3年（1783）大噴火の記録は、記録・絵図・公式古文書・日記・書信などこの地方にも多く残っている。
- ③ 火山活動の地球物理学的研究が、日本では勿論、世界的にも最も早くから行われ、その成果が日本の火山学・地震学を進歩させた原動力となっており、世界的にも高く評価されている。当遺跡はこの浅間山の南斜面山麓が佐久平の平坦面に交ってゆるやかな南傾斜の続く標高700m～710m附近的湯川の東沿岸の台地上に立地している。湯川は軽井沢町千ヶ滝に源を発し、南流して、同町油井部落で南軽井沢から西流して来る泥川と合流して流路を西に変え、御代田町に入



第2図 本遺跡地南より平尾山・浅間山を望む

るまでに北の浅間山麓・南の森泉山方向の両側の小支流を合わせて水量を増し、深い浸蝕峡谷を作つて流路を西北に変え、湯川ダムの多目的大貯水を作り、佐久市横根部落北方で再び流路を南に変えて佐久市内に入ると横根附近から河幅も広め两岸に浸蝕河岸段丘を作り、谷中に小冲積地を作り、最も古い開拓水田がここにある。当遺跡はこの湯川東岸台地上1.5kmにある。

湯川西岸佐久平地区（岩村田台地）には火山山麓特有な田切地形が見事に発達している。これは新しい火山、浅間山の火山噴出物・火山砂・火山灰・浮石の堆積層は未分解で粘土化せず凝結力が誠に乏しいため流水、洪水等の浸蝕に対する抵抗力が頗る弱く一度流路になると大きな断面が垂直に近い谷に発達する可能性が多く、火山国日本の第四紀の新しい火山の裾野地帯各地に見られる田切地形となっている。御代田駅から小海線三岡駅附近が最も顕著である。湯川東岸地区には田切地形の著しいものはないが当遺跡の西側の旧平尾道・安原用水・東中学東側凹地・霞川等の凹地が田切初期の地形である。それらの初期地形間の南北に続く台地が古墳時代以来古代中世の住居遺跡の分布地である。

II 地質

本遺跡地周辺の地質構成で野外で直接観察できる最も古いものは平尾山（1155m）を構成する平尾溶岩である。平尾溶岩は塊状火山（トロイデ火山）として噴出した濃青緑色緻密な玻璃質複輝石安山岩で石材としては頗る良材で佐久産姫小松石と称されて珍重され、他地方にも輸出されている。荒船火山より古く、長い間の風化浸蝕をうけて山全体に放射谷が発達し、佐久平の東北隅に屹立して展望も広く佐久市市民の森として親しまれている。

平尾山の東麓を覆い重なっているのが荒船山の噴出物の溶結凝灰岩（佐久石）で霞川左岸安原・新子田附近・關伽流山の奇岩絶壁以東この附近一帯に広く分布している。佐久石と称せられているものの中で特に業者間では安原石が最も良質のものとされ、古くから石造加工品の原材料として珍重されている。この溶結凝灰岩は荒船火山活動最盛期に多量の安山岩質灼熱火山灰を多量に長期間噴出し、厚い堆積層を構成し熱と加重圧によって再溶融固結したもので、荒船火山を中心として志賀谷山峡の奇岩・田口・青沼まで広く分布しているもので安原石は堆積再凝固の状況が特に良好であったものであろう。

堆積岩層としては英多神社南の香坂越尾根南部に小部分相浜層の砂質凝灰岩・凝灰岩の互層の中から広葉樹化石を産出した事があり洪積初期の地層が僅かに分布していることが明らかとなっ



第3図 真顔福荷社北の湯川断崖

ている。

安原・新子田・平根地区の平坦地を構成する地層は浅間火山の噴出物の堆積層で基盤は黒斑火山の噴出物起源の湖沼性堆積物火山性砂岩・凝灰岩・凝灰質礫岩の互層で湯川べり谷底部に一部露出が見られ黒岩城埋文調査の際、深掘トレンチで確認された。その上部には軽石の大小の礫を多量に含んだ火山灰砂の厚い層が重くなっている。この層を第一軽石流と呼んでいるが前掛火山の噴出物で浅間山の南斜面の大部分と平坦地佐久平北半を広く厚く覆っている。空中堆積物であるので原地形によって厚さの変化が著しいがこの地層分布内に田切地形が発達し、その崖面で構成物質層厚を観察できる。この遺跡近くの野露出は鼻顎細荷社境内で約20mの断崖が見られる。この軽石流は2回にわたって流出したものであるが第二回軽石流中に含まれる炭化木幹についてC¹⁴年代測定では10,650~11,300年前と測定値が出ている。(小諸市誌)

この層の上面が今回の池畠・西御堂遺跡の層序模式図地山第III層合軽石疊黃褐色土層(ローム)である。

(白倉盛男)

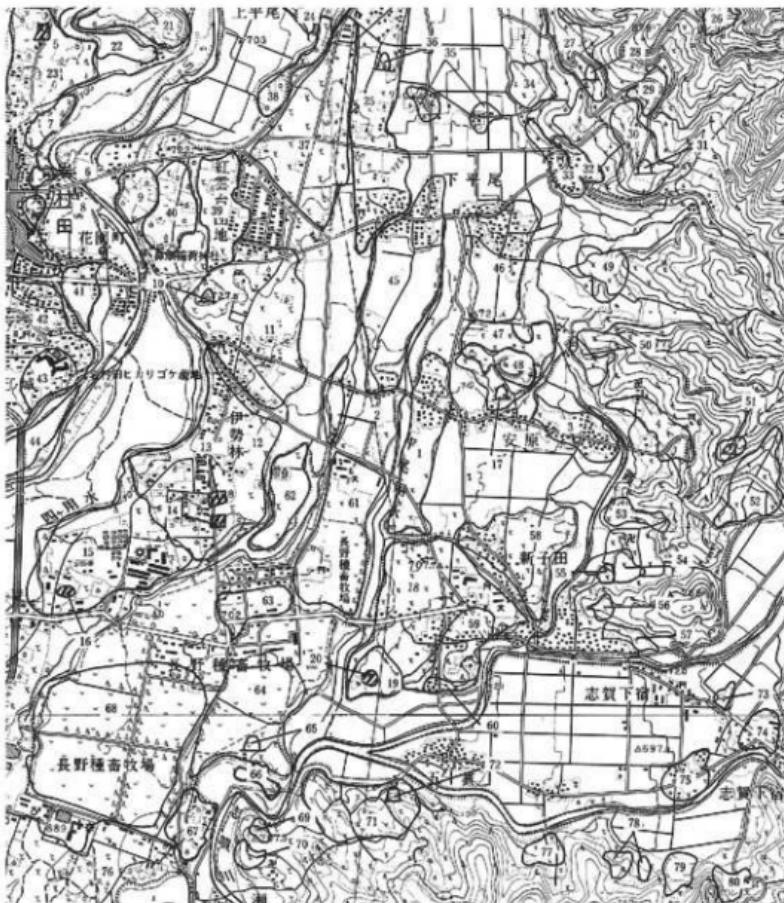
第2節 遺跡の歴史的環境

筒塚遺跡群池畠遺跡は、佐久市安原地籍の浅間火山堆積物による平地が幾つかの田切りによつて区切られた標高710m内外の南北に細長い台地上に位置し、猫久保遺跡群西御堂遺跡は、その台地から約300m西方の同様な台地上に所在しており、安原用水により境をなしている。

湯川左岸、平尾富士山麓南西に広がる台地は、埋蔵文化財の散布密度が濃く、池畠・西御堂両遺跡の北部には、横根の30余基を数える群集墳(塚原・上の原・上長坂・十二平・輪子等の古墳群)、上平尾の30基を数える群集墳(矢口・平・腰越・矢沢・城・宿・塚畠等の古墳群)、下平尾群集墳(一本松・丸山・湯流等の古墳群)、安原綾敷古墳、玄室に側室のある安原大塚古墳、南方に新子田四ツ塚古墳、安原蛇塚古墳等が点在している。

更に北方に、大角遺跡(49)・東村遺跡群(46)・後室遺跡群(47)・戸屋敷遺跡群(45)、南に高師町遺跡群(61)・戸坂遺跡群(18)・蛇塚遺跡群(11・12)・新子田神明の木遺跡(58)・権現平遺跡(53)、東に宿上屋敷遺跡(3)・下川原・光明寺遺跡(4)等がある。尚、筒塚遺跡群・猫久保遺跡群は、池畠遺跡・西御堂遺跡の南北にその範囲の広がりを見せており、これらの遺跡地からは、分布調査により縄文期から古墳時代に至る遺物の採集がされたが、発掘調査により確認された遺跡は数少ない現状である。

付近の遺跡を時代別にみると、安原池前遺跡・下平尾の山伏木遺跡では、多量の縄文中期の遺物が出土している。弥生時代では、新子田の戸坂遺跡(20)で後期の住居址1棟が検出されている他に、高杯・甕等豊富な遺物が出土している。和田上南遺跡では、中期の住居址等5棟が検出



第4図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000 國土地理院地形図による)

され、和田上遺跡(64)は後期の土器等が多量に表採され大きな集落の存在が予想される。尚、湯川左岸池畑遺跡西方に位置する下小平遺跡(9)は、昭和55年度に発掘調査が実施され、ベッド状遺構を有するものを含め住居址5棟・方形周溝墓2基、他に壇・甕・台付甕・高坏・坏・瓶等の土器及び土器片多数と土製鍵錠車1・鉄器1・石鏡等を検出している。

古墳時代になるとこの地域も遺跡は増加し、戸坂遺跡では、昭和46年度に発掘調査が実施された古墳時代後期の住居址4棟と高坏・甕類の土器を検出している。同時期の古墳として桙敷古墳・

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考	
					縄	弥	奈	平	中		
1	130	黄牛道跡群	安原字筒堀・油畠・下油 新子田字田端	台地	○			○		本調査(油畠遺跡)	
2	128	猫久保遺跡群	安原字端久保・西御堂	〃				○		本調査(西御堂遺跡)	
3	133	宿上屋遺跡群	安原字上屋敷	〃				○			
4	135	下川原・光明寺遺跡	安原字下川原・光明寺	傾斜地				○			
5	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	台地	○			○		昭和55年度発掘調査	
6	51-1	王城跡	岩村田字吉城	〃	○	○	○	○	○	昭和54年度一部発掘調査	
7	51-2	石差城跡	岩村田字石並地	〃	○	○	○	○	○		
8	51-3	黒岩城跡	岩村田字古城	〃	○	○	○	○	○	昭和53・54年度一部発掘調査	
9	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	段丘	○	○	○	○	○	昭和55年度発掘調査	
10	126	蛇塚古墳	安原字蛇塚	台地	○					昭和57年度試掘調査	
11	119	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚・西大久保 北御張・南御張	〃				○			
12	120	蛇塚B遺跡群	新子田字蛇塚・内池・北野馬久保 ・野馬久保	〃				○			
13	120-1	蛇塚B(第一次)	新子田字野馬久保	〃				○		昭和54年度発掘調査	
14	120-2	蛇塚B(第二次)	新子田字野馬久保	〃				○		昭和58年度発掘調査	
15	122	野馬塚遺跡群	猿久保字野馬塚	〃	○	○	○	○			
16	122-1	野馬塚遺跡	猿久保字野馬塚	〃	○					昭和56年度発掘調査	
17	141	安原大冢古墳	安原字滅前	〃		○					
18	263	戸坂遺跡群	新子田字戸坂・戸坂口・五ヶ久保・ 家原・里原・高崎・高ヶ反坂・供應塚	段丘	○	○	○	○	○		
19	275	鳥坂城跡	新子田字戸坂	〃				○			
20	263-1	戸坂遺跡	新子田字戸坂	〃	○		○			昭和46年度発掘調査	
No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名	No.	佐分No.	遺跡名
21	10	栗毛板遺跡群	36	73	宮の西古墳	51	140	入大久保古墳群	66	253	和田遺跡
22	44	上岩子遺跡	37	47	西久保遺跡群	52	138	東大久保遺跡	67	254	豈の宮遺跡
23	52	岩村田遺跡群	38	46	腰巻遺跡	53	137	椎見平遺跡	68	250	馬鹿口遺跡群
24	53	渾石遺跡	39	48	様敷遺跡	54	265	池端遺跡	69	257	中条城跡
25	56	東大久保遺跡群	40	49	上小平遺跡	55	551	池端城跡	70	258	中条峰古墳群
26	65	下伴助遺跡	41	118	下信濃石遺跡	56	276-1	市神古墳群	71	256	寄山遺跡群
27	61	橋ヶ塗遺跡	42	117	上の城遺跡群	57	266	坂内遺跡	72	262	寄山古墳
28	74	一本松古墳	43	542	橋ヶ塗跡	58	264	新子田神明の木遺跡	73	268	石田遺跡
29	64	下伴助遺跡	44	124	岩井堂遺跡	59	545	浅井城跡	74	269	志賀神明の木遺跡
30	70	丸山古墳群	45	127	戸屋敷遺跡群	60	267	家之前遺跡	75	270	高老在池遺跡
31	70-1	丸山古墳1号墳	46	131	東村遺跡群	61	129	高師町遺跡	76	255	深瀬遺跡群
32	63	万助久保遺跡	47	132	後室遺跡群	62	121	東内池遺跡	77	271	清水窑遺跡
33	62	木田橋遺跡	48	139	燕跡	63	251	小池遺跡	78	272	隈狹遺跡
34	60	北山寺遺跡	49	136	大角遺跡	64	252	和田上遺跡群	79	273	上南和田遺跡
35	59	宮前遺跡	50	134	岩久保遺跡	65	261	和田上古墳	80	274	安坂遺跡

蛇塚古墳2基・和田上古墳が存在する。平安時代では、更にその数は増し、猫久保・上小平・蛇塚A・B・戸坂・和田上・和田上南遺跡等が所在する。これらの遺跡のうち、蛇塚B遺跡は昭和58年度に発掘調査が行われ住居址5棟・土壙址2基・溝状遺構1基が検出され、坏形土器・甕形土器・須恵器類が多数と灰釉陶器・鉄器などが出土している。昭和46年度に発掘調査が実施された戸坂遺跡からは、住居址4棟と高杯・甕等の土器類が検出されている。

(黒岩忠男)

第III章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

池畠遺跡・西御堂遺跡は隣接し、田切り地形によって区画され、両遺跡共台地上に位置する。池畠遺跡の標高は710m付近を測り、遺跡の中央部が高く、東西両側に向かって緩やかに傾斜している。

池畠遺跡の層序は、遺構覆土に至るまでに2分される。

第I層は、耕作土で、粒子細かく、土質はパサパサとした感触を受け、吸水性に富んでいる。層厚は20~30cmを測る。

第II層は、ローム層に至る漸位層であり、下部は遺構構築面である。粒子細かく、土質はやや粘性がある。

第III層は、1~5cm大の軽石を含むローム層であり、遺構は第III層にまで掘り込んである。

西御堂遺跡の標高は711m付近を測り、発掘区の東端より西に向かって緩やかに傾斜している。尚、西端は層序模式図には表わされなかったが、1m前後の盛土が行われている。

西御堂遺跡の層序は、遺構覆土に至るまでに2分される。

第I層は、耕作土で、粒子細かく、土質はやや粘性がある。

第II層は、昭和初期頃まで水田として使用した耕作面で、水田の床土が4~6cm堆積している。

第III層は、池畠遺跡層序第III層と同じである。

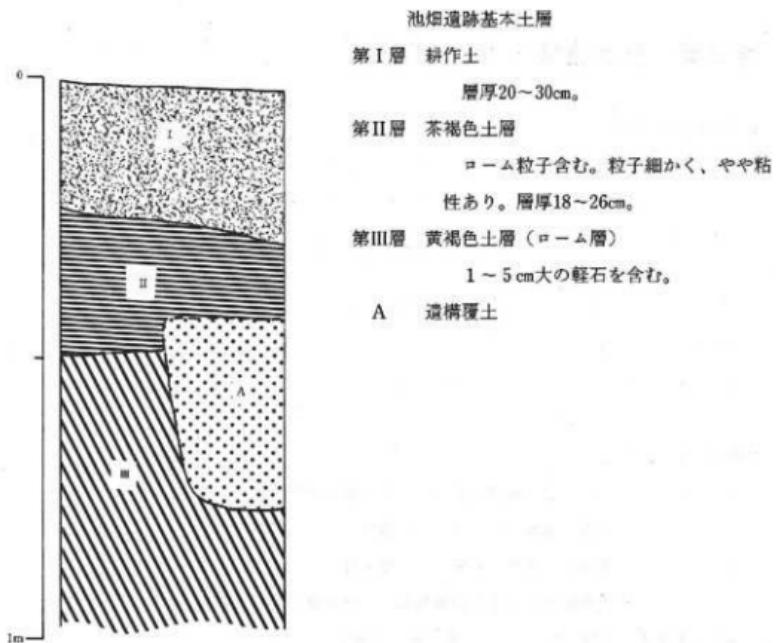
遺構覆土

池畠遺跡において検出された住居址2棟は、道路幅の発掘にもかかわらず、幸運にも全プランが確認できた。第1号住居址は4層に分かれ、第2号住居址は7層に分かれ。いずれもレンズ状に堆積しており自然堆積と思われる。覆土は黒褐色土層と黒色土層を基調とし、土質・含有物に類似性が観察でき、両住居址は時期的近似性が認められる。

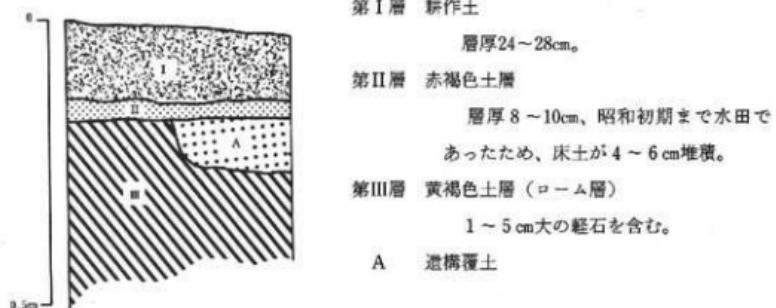
溝状遺構は道路幅の発掘のため全容を知り得ないが、第1号溝状遺構は黒褐色土層を基調とし、4層に分かれ、レンズ状に堆積しており自然堆積と思われる。第2号溝状遺構は1層のみである。

第1号土坑は4層に分かれ、上部1層は黒色土層を基調とし、下部3層は褐色土層を基調としており、上部と下部で堆積状態に変化が観察できる。

西御堂遺跡において検出された第2号土坑は6層に分かれ、堆積状態から人為堆積と思われる。



第5図 池畠遺跡基本層序模式図



第6図 西御堂遺跡基本層序模式図

第2節 検出遺構・遺物の概要

池畠遺跡検出遺構

- 竪穴住居址 2棟 第1号住居址（弥生時代終末～古墳時代初頭）
第2号住居址（弥生時代終末～古墳時代初頭）
溝状遺構 2基 第1号溝状遺構（時代不明）
第2号溝状遺構（時代不明）
土 坑 1基 第1号土坑（奈良～9世紀代）

西御堂遺跡検出遺構

- 土 坑 2基 第1号土坑（時代不明）
第2号土坑（現代）

池畠・西御堂遺跡出土遺物

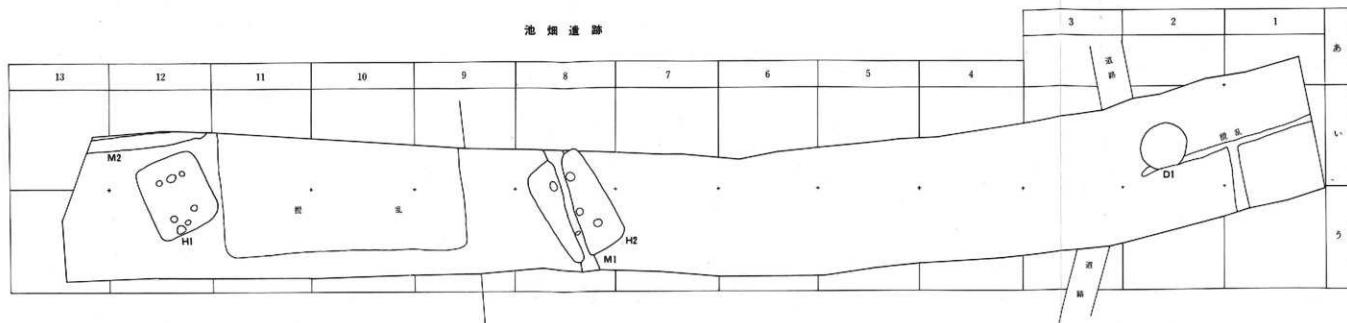
- 土 器 弥生土器（後期～終末）…壺・甕・高杯・蓋・手捏等
古式土師器……………高杯
土師器（奈良～平安）……甕・杯
灰釉陶器片、中世以降陶器片（すり鉢・染付茶碗等）
石器・石製品 石核（チャート）、撒入磚、筋鍤車
土製品 土製円板
自然遺物 馬骨・牛骨

(羽毛田伸)

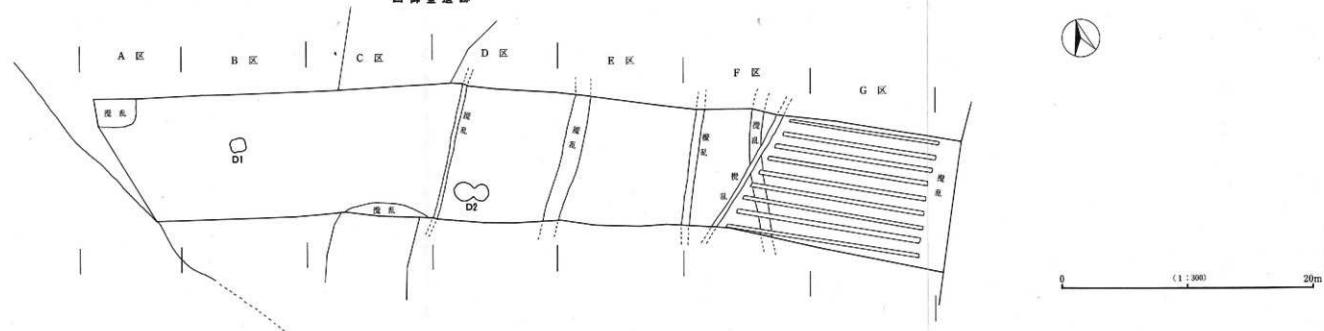


第7図 池畑・西御堂遺跡の地形及び発掘区段図 (1:2,500 佐久市基本図15・16による)

池 烟 遗 路



西 御 堂 遺 路



第8図 池烟・西御堂遺跡遺構全体図

第IV章 池畠遺跡の遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) 第1号住居址

遺構（第9・10・11図、図版三）

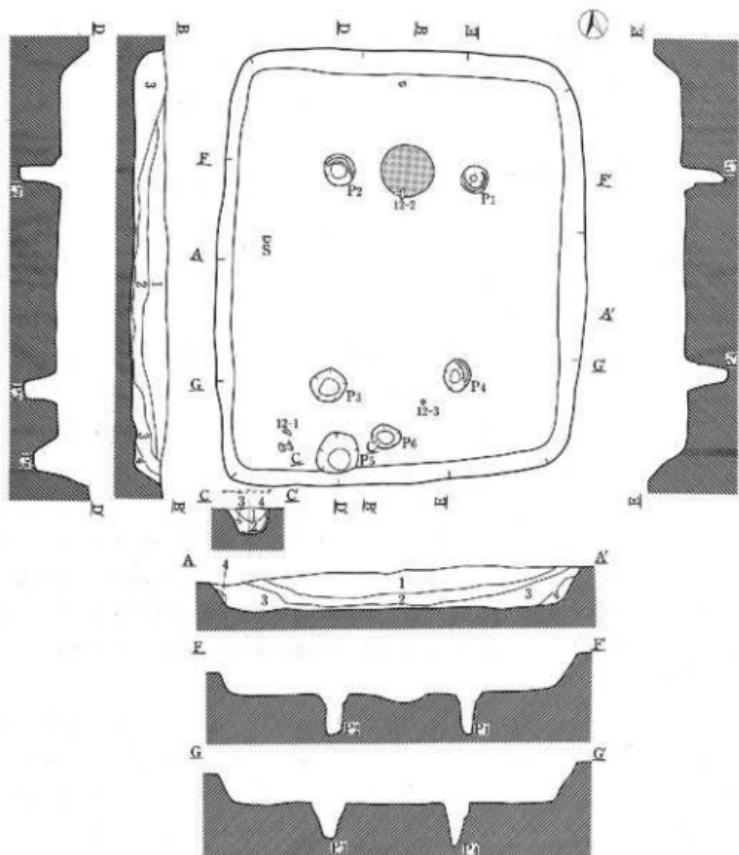
本住居址は、いー12、うー11・12グリッドに位置し、単独遺構で発掘区西端に位置する。

検出面は全体層序第II層下部茶褐色土面で検出された。主軸方位はN-7°-Eで、平面プランは東壁502cm、西壁554cm、南壁434cm、北壁420cmで長軸552cm、短軸465cmを測り、南北にやや長い隅丸方形を呈する。確認面からの壁高は24~54.5cmを測り、床面積（ピット等も含む）は25.1m²を測る。

覆土は4層に分割され、レンズ状の堆積を示しており、安定した自然堆積と考えられる。第1層は黒褐色土でバミスを少量含み、土質はしまりあり、粘性が弱く、粒子が細かい。第2層は黒色土で第1層に土質・含有物が類似している。第3層は茶褐色土でローム粒子・バミスを含み、土質はしまりあり、粘性なし。第4層はローム粒子を多量に含む淡い茶褐色土で壁崩落によるものと思われる。

ピットは計6個あり、主柱穴はP₁~P₄の4箇で、床面中央部にP₁からP₂の距離153cm、P₂からP₃の距離258cm、P₃からP₄の距離137cm、P₄からP₁の距離237cmを測り長方形に配置されている。P₁~P₃は円形を呈し、P₄は楕円形を呈する。土層はいずれもテラス状の所で2分され、上層は黒褐色土層で、下層は淡い黄褐色土層で、ローム粒子が主体であるが、所々に黒褐色土を含み、土質はばさばさとしており、P₁~P₄いずれも柱痕は検出されなかった。P₁は上面径38cm、深さ56~60cmを測り、断面形は有段のU字状を呈する。P₂は上面径45cm、深さ56~58cmを測り、断面形は有段のU字状を呈する。P₃は上面径45~50cm、深さ47~50cm、断面形は有段のU字状を呈する。P₄は上面45×37cm、深さ64cm、断面形はV字状を呈する。

P₅は南壁直下中央西に位置し貯蔵穴と考えられる。平面形態は、上面径60cmの円形を呈し、深さ35cmを測り、断面形は逆台形を呈する。土層は4層に分割される。P₆は南壁下中央に位置し、上面33×42cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測り、断面形は逆台形を呈する。入口の施設に關係があるものと思われる。



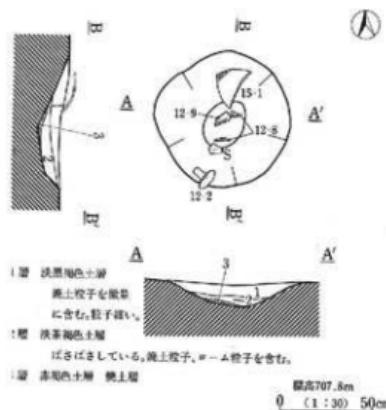
- 1層 黒褐色土層 粘性弱く、しまりあり、粒子細い、バミクスを含む。
 2層 黒色土層 粘性弱く、しまりあり、粒子細い、バミクスを含む。
 3層 茶褐色土層 粘性なし、しまりあり、バーム粒子+バミクスを含む。
 4層 淡茶褐色土層 3層よりモローマ粒子を多量に含む。(鉛灰帶)

- P₁ 土器焼痕 (標高707.8m)
 1層 黒褐色土層 しまりあり、粒子細い。
 2層 淡黒褐色土層 粘性あり、粒子細い。
 3層 淡茶褐色土層 ローム粒子を含む、難石が1cm位少量含む。
 4層 新茶褐色土層 ローム粒子+新茶褐色土層を含む。(鉛灰帶)

標高708.3m
(1:80) 2m

第9図 第1号住居址実測図

炉はP₁・P₂の柱穴間中央に位置し、形態は地床炉である。上面形は60cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。土層は3層に分かれ、1層は淡茶褐色土層で、僅かに焼土を含む。2層は淡茶褐色土層で焼土・ローム粒子を含み、土質はばさばさしている。3層は加熱によりローム層が赤褐色に



第10図 第1号住居址炉址実測図

遺物（第12・13図、図版十一・十六）

本住居址からは弥生土器・古式土器が共存して出土している。器種には甕・壺・杯・高杯・手捏・蓋（高杯脚部転用土器？）がある。出土遺物が少なく、この内、図化できたものは11点（実測図7点、拓影図4点）である。

甕についてはいずれも破片のみで全容を知り得ないが、弥生後期の様相を受け継いだ、櫛描波状文の施された12-7・8・9、櫛描斜走直線文の施された12-10が出土している。内面は丁寧なヘラナデで、12-7は口縁部内面に僅かに赤色顔料の付着が観察でき、12-7・8・9は第2次焼成による煤の付着が観察できる。

壺については頸部から胴部にかけての破片15-1が出土している。これは頸部に弥生後期的様相を受け継いだ櫛描T字文が施され、胴部は次期的様相をうかがわせる球形を呈し、胴下部変換点で弥生後期の系譜をひく稜の名残が認められる。調整は外縦位のヘラミガキ、内面は従来の弥生後期壺のハケメ調整より細かいハケメ調整である。

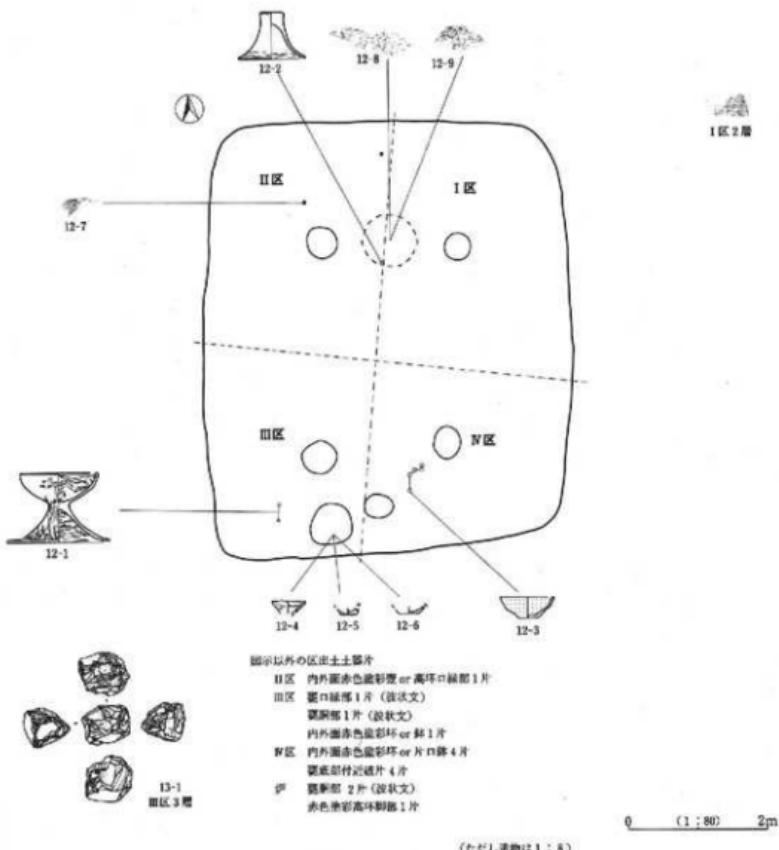
尚、15-1の壺は第2号住居址内出土の壺胴部破片と接合し、第1号住居址と第2号住居址の時間的近似期を提示するものとして、貴重な資料といえよう。他に図示し得なかったもので赤色塗彩の口縁部破片がある。

高杯については完形品として12-1が出土した。12-1は無彩で杯部外傾内弯ぎみに立ち上がり、口縁部内弯する。脚部は「ハ」の字状に大きく外反する。調整は杯部外縁に縦位の丁寧なヘラミガキが施され、口縁部外縁に横位の丁寧なヘラミガキが施されている。脚部外縁裾部に

変化しており、火床と思われる。この炉からは灰・炭化物が観察できず、長い間使用したとは思われない。

遺物の出土状況については、炉内より12-8・9が出土しており、15-1の壺胴部破片は火床より6~8cm上で内面を下に向かた状態で検出された。12-2は炉周縁南端部上に横転した状態で出土した。12-3はP4から南西に25~65cm離れた位置で底部が床面に接した状態で出土した。12-1は南西壁隅下付近に床面に接し横転した状態で出土した。

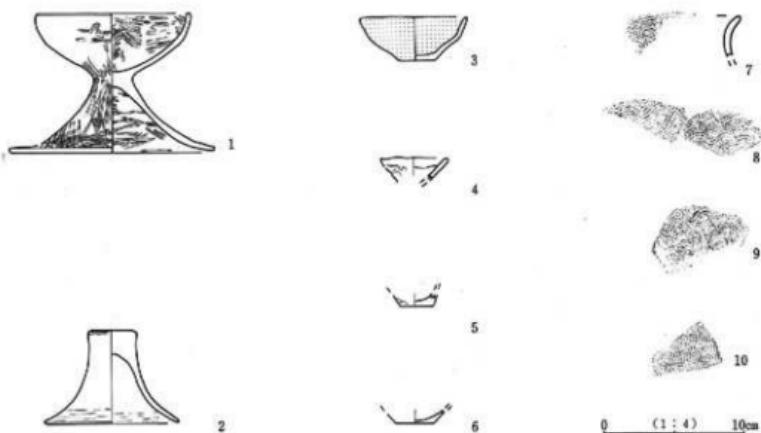
P4内より12-4・5・6が出土した。これらの土器は、その出土状態から本住居址に共存、もしくは時間的近似期のものと考えておきたい。



第11図 第1号住居址出土遺物分布図

斜位のヘラミガキの後、縱位の丁寧なヘラミガキが施されている。杯部内面は暗文風なヘラミガキが縱位羽状に施され、脚部内面はヘラケズリの後、横位のヘラミガキが施されている。また内外面共にヘラミガキの時に工具に付着していたと思われる赤色顔料の付着が観察できる。尚、12-1の類例は佐久地方にはまだ出土しておらず、在地の土器とは異質な土器として、今後の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器編年の上で貴重な資料になると思われる。その他、図示し得なかったが、赤色塗彩の脚部据縫部の小片が出土している。

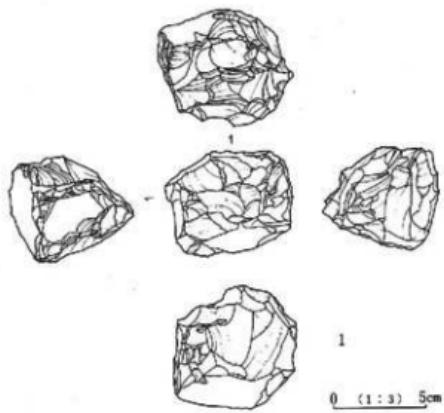
手捏については12-3・4・5・6が出土した。12-3は内外面共に赤色塗彩が施されている。



第12図 第1号住居址出土土器実測図及び撮影図

12-4・5・6は内外面共に指頭による調整で、12-4は内外面共に第2次焼成による煤が付着しており、手捏の用途の示唆になるであろう。

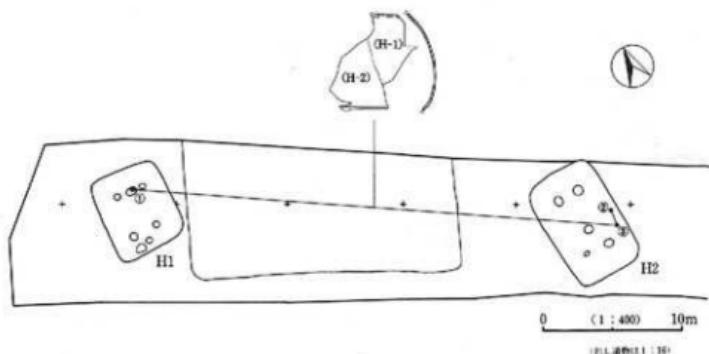
他に蓋(高杯脚部転用土器?)の12-2は炉周縁部南端より出土しており、支脚石の代用とも考えられる。形態は柱状で裾部「ハ」の字状に開き、天井部はやや凸状である。調整は外面天井部ナデ、柱状部縦位のヘラナデ、裾部ヨコナデが観察でき、内面は裾部ヨコナデが認められる。また内外面共に赤色顔料及び、第2次焼成による煤の付着が観察できる。



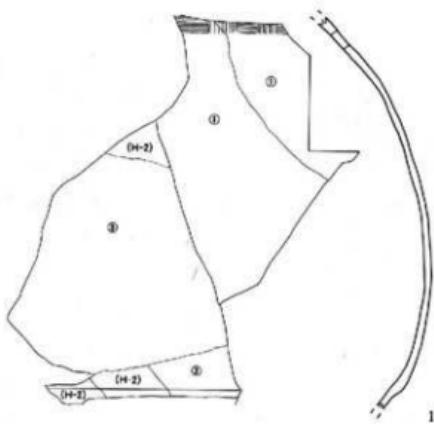
第13図 第1号住居址出土石器実測図

その他、図示し得なかったもので内外面赤色塗彩の片口鉢口縁部破片・杯小片が出土している。尚、13-1は石核で、握りこぶし大の石質チャートの河原石で、千曲川から採取したものと思われる。

以上、本住居址の出土遺物には、弥生後期の系譜をひく壺・壺、次期的様相をひく壺・手捏、在地の土器とは異質な高杯等が共存しており、時期判断の良好な遺物と考えられるが、佐久地方



第14図 第1・2号住居址間接合関係関連図



第15図 第1・2号住居址出土壺形土器実測図

において明確な弥生時代及び古墳時代の編年が確立していないことと、他に同様な資料がみられないため、現段階で細分化することは避け、本住居址の所産期は弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えておきたい。

(羽毛田伸)

第2表 第1号住居址出土土器観察表

辨別番号	器種	部位	法量	成形及び器形の特徴	調査	参考
12-1	高环	口 底	19.9 9.8 14.6	最大径を肩部端部に持ち、肩部大さく「ハ」の字状に広がり、底部は、内側して立ち上がる。	内) 手延は丁寧なへらごき後の、更に細い単位の精良なヘラゴキが段階形状で施されている。肩部にはラナデの跡とテラミガキが施されている(外) 手延は丁寧なへらごき。削削は底部へラミガキの後、更に細い単位の精良が施されている。	回転実測A 色調は暗褐色を呈し、土師的な感じを受ける。 No.9・10
12-2	蓋・ 手	天 口	3.4 6.5 9.5	高环の脚部の形態をとるが、接合部の觀察により、脚部とは萼えられず、やや斜めで脚部が「ハ」の字状に開く。	内) 落部付近コナデで、他のあまり調節が観察できない。赤色顔料が多く付着しているが、着彩とは考へられない。 外) 天部付近は、丸なナデ、その下部は複雑な单位をもたない瓶方式のヘラゴキがみられ、落部付近はコナデが施されている。底部的に赤色顔料がみられる。	完全実測 No.11
12-3	环 (± ±.7)	口 底	7.6 3.1 2.6	輪郭みが粘土層の巻き上げにより成形した手捏ね土器。	内) 動向および各部のヘラナデ。 外) 脚部の跡からナデ。 内・外面とともに赤色塗装が施され、底部底面は無塗装。	回転実測A No.2~3, IV区床直
12-4	环 (± ±.7) 脚上	口 (4.8) (1.5)	—	輪郭みが粘土層の巻き上げにより成形した手捏ね土器。	内・外面とともに指頭による調整。	完全実測 色調は内・外面ともに暗褐色を呈する。P5
12-5	环 (± ±.7)	底	— 0.9 2.4	底部付近に指頭による押抜がある手捏ね土器。	内・外面とともに指頭による調整。	完全実測 色調は内・外面ともに暗褐色を呈する。P5
12-6	环 (± ±.7)	底	— 0.9 2.6	倒れかが粘土層の接合部分のようにも見える手捏ね土器。	内・外面とともに指頭による調整。	回転実測B 色調は内・外面ともに暗褐色を呈する。P5
15-1	壺	瓶 底下	— (27.5)	脚下部に筋造水土器特有の筋を持ち、脚部は球状に近いと思われる。	内) ナデによる調整。 外) 脚部は筋造のへらごきのヘラナデが丁寧に施されている。 文) 縦面に9~10段の横推丁字文が施されている。	回転実測B 美しい褐色を呈し、やや薄手である。H15cm, H2.6cm, D7cm, IV区1~2層, M1

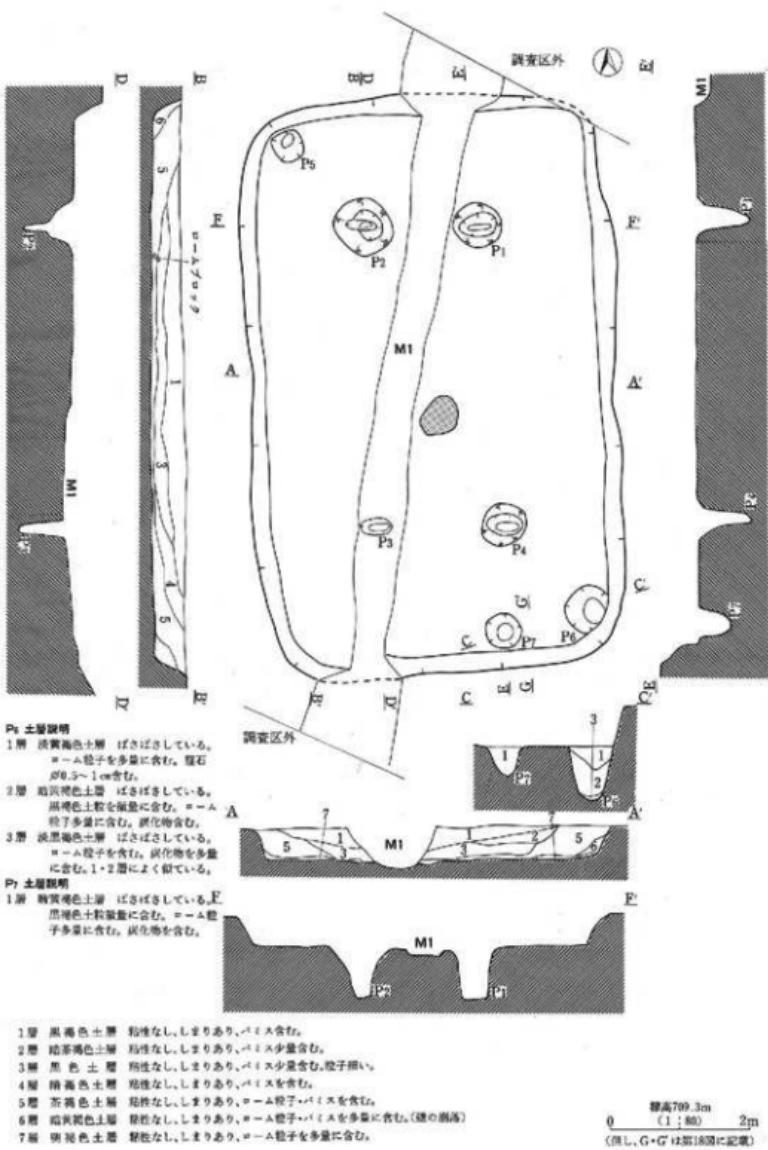
2) 第2号住居址

遺構(第16~17・18・19図、図版四・五)

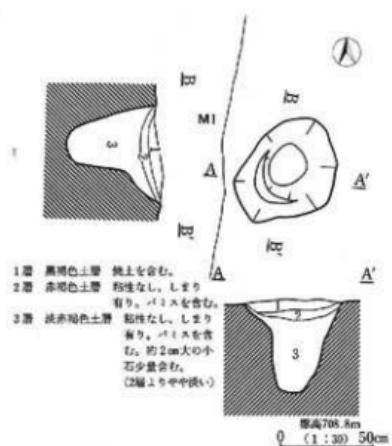
本住居址は、調査区中央付近一8、一9~7・8グリッド内に位置し、全体層序第III層黄褐色ローム層上面において検出された。第1号溝状遺構と重複しており、住居址のはば中央を南北に切られている。平面形態は、長軸764cm、短軸478cmを測り、短辺と長辺の比は1:1.6の南北に細長い廣丸長方形を呈し、床面積(ピット等を含む)は35.6m²を測る。長軸方位はN-3°-Eを示す。

覆土は7層に分割された。第1層は黒褐色土層で、バミスを含む。第2層はバミスを少量含み粘性のない暗褐色土層。第3層は粒子細かく粘性のない黒褐色土層である。第4層は暗褐色土層でバミスを含む。第5層はローム粒子・バミスを含む茶褐色土層。第6層は壁の崩落と思われる暗黄褐色土層で、ローム粒子・バミスを多量に含む。第7層は床面直上にみられ、ローム粒子を多量に含む明褐色土層である。確認面からの壁高は、34.5~58.5cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁体は、黄褐色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。壁溝は検出されなかった。

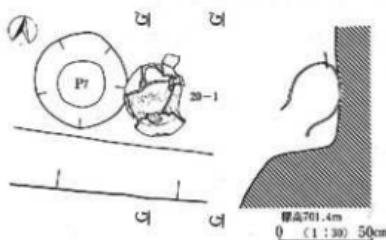
床面は、黄褐色ローム層を踏み固めて堅緻な状態であり、全体にはば平坦である。ピットは総数で7個検出された。主柱穴はP1~P4で東西170cm、南北430cmの長方形に配置されている。覆土はテラス状の部分で2分され、上層はローム粒子を微量に含む黒褐色土層で、下層はローム粒子



第16図 第2号住居址実測図



第17図 第2号住居址炉址実測図



第18図 第2号住居址遺物出土状況実測図

となろう。

遺物の出土状況は、平面分布についてはII区・IV区に集中してみられ、II区より、20-2, 22-1がP₂上面床面付近より検出された。IV区からは、南壁東側直下より、20-1が床面に接し、横転した状態で出土した。またP₄付近床面より、20-3, 21-8が横転し、土圧によって潰れた状態で出土した。21-12はP₄から東に60cm離れた床面より脚部を欠損して出土した。21-14はP₇の北西34-56cmの床面より出土した。21-13は東壁北側の壁際覆土上面より出土した。その他、20-4, 21-7・9・10は、住居址南側に破片が散乱している状態が看取される。垂直分布は、床面直上あるいは床面付近に遺物が集中している傾向が認められる。以上本住居址の出土遺物は、その出土状態から、本住居址に共存する可能性が強いものと考えられる。

を主体とする淡い黄褐色土層で、粘性はなくばさばさとしている。平面形態は、P₃を除き、上面は約60~80cmのほぼ円形で、底面は20~34cm×8~13cmの長橢円形を呈するが、P₃も第1号溝に上部を破壊されているものの、同様の形態であったと考えられる。断面形は有段のU字状を呈する。P₅は北西隅に位置し、径42cmでやや方形を呈し、深さは16cmを測る。P₆は南東隅に位置し、貯藏穴と思われる。径66cmのほぼ円形を呈し、深さ78cmを測り、断面形はU字状を呈する。P₇は南壁下中央東に位置し、入口施設に関係するものと思われる。径50cmの円形で、深さは42cmを測り、断面形はU字状を呈する。

炉址は、住居址のほぼ中央南寄りに位置する地床炉で、平面形態は64×48cmの楕円形を呈し、深さは47.5cmを測り、西から南にかけてテラスを有する。覆土は3層に分割され、1層は黒褐色土層で焼土を含む。2層は焼土層で、火床面は焼けて赤褐色を呈する。さらにその下に38cmの掘り込みがあり、2層よりも淡い赤褐色の焼土が充填されている。このように深い掘り込みをもつ炉址は佐久地方においては類例がなく、該期の炉址の形態を考究するうえで貴重な資料

遺物（第20・21・22図、図版十二・十三・十四・十六）

本住居址からは、弥生土器と土師器（1片）が出土している。土師器は壺の口辺部であり、混入遺物であると考えられる。弥生土器の器種には、壺・甕・高壺・蓋・土製円板がある。そのうち図化できたものは18点（実測図15点、拓影図3点）である。

壺は、21-9・10があり、21-9は胴中位～底部片であり、胴下部に弥生時代後期箱清水式期の様相のみられる稜線をもち、下半は直線的に底部に収縮する。調整は外面にヘラナデ、内面に赤色塗彩が施される。

甕には、口縁部貼付口縁で、胴部球胴形を呈し、外面に櫛描波状文を施した後、さらに櫛描斜走直線文を継位羽状に施した20-1と頸部に櫛描2連止め簾状文、口辺部・胴上半部に櫛描斜走直線文を継位羽状に施した20-2がある。また、頸部から胴上半部に櫛描波状文の施された20-3、頸部に櫛描3連止め簾状文、胴部に櫛描波状文の施された20-4、21-6、頸部に櫛描2連止め簾状文、口辺部・胴部に櫛描波状文を施した21-7、頸部に櫛描4連止め簾状文、口辺部に櫛描波状文の施される21-8がみられる。さらに20-5、21-11は底部のみで全容は知り得ないが、20-5は胴部にわずかに櫛描波状文が観察できる。上記の甕形土器の中で内面に僅かではあるが赤色顔料の付着が観察できるものに、20-3、21-6・8がある。22-1aと22-1bは同一個体の甕の胴部片と思われ、胴上半部に櫛描斜走直線文が施される。22-2は甕の胴下半部に位置する破片であり、僅かに櫛描波状文と斜走直線文が観察される。

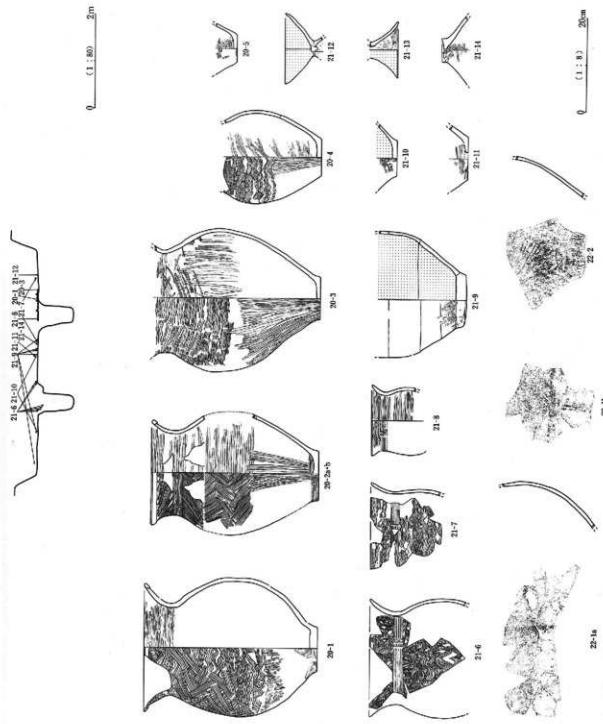
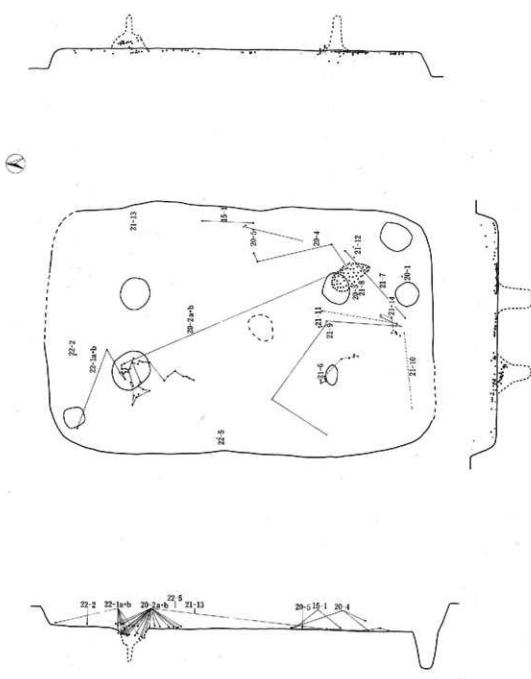
高壺には、口縁端部が内弯し、脚部は「ハ」の字状に開くと思われ、壺部は内外面、脚部は外面に赤色塗彩の施される21-12、脚部のみで外面に赤色塗彩の施される21-13があり、いずれも脚部内面に赤色顔料の付着が観察できる。蓋には21-14があり、天井部に一孔穿孔され、調整は内外面ともヘラナデが施される。

土製円板には、22-6があり、表面にかすかに櫛描文と思われるものが観察でき、甕胴部片の再加工品と思われる。

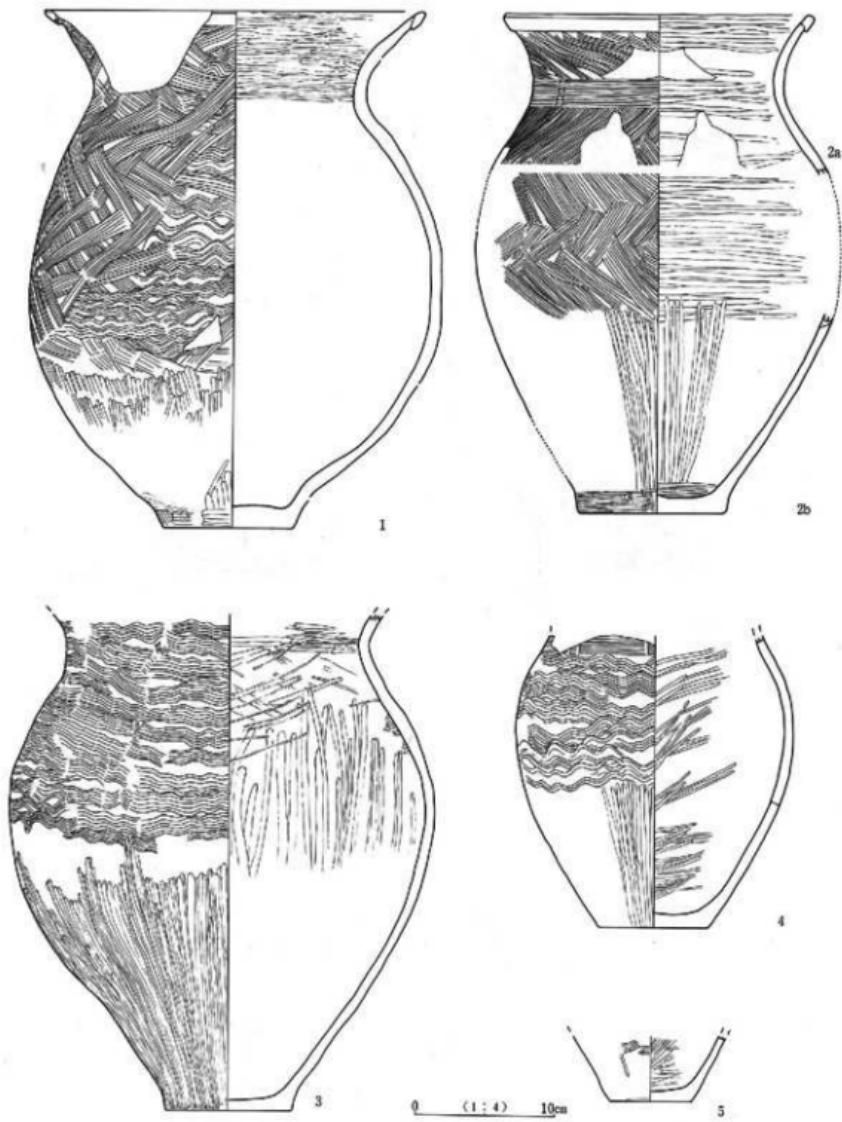
その他、図示し得なかったものに、外面に赤色塗彩の施された壺、口辺部・胴部に櫛描波状文・斜走直線文の施された甕などがある。

22-3は黒曜石製石鎌で一部に押圧剝離が観察されるが、欠損品であるため全器形は知り得ない。20-1と同一地点より出土しており、本住居址に共存する可能性も考えられる。22-4は頁岩製の撒入礫であり、表面に研磨痕が認められるが、欠損品であり、性格は不明である。尚、本遺跡の東方約700mに位置する宿上屋敷遺跡においても同様な撒入礫が出土しており、今後、性格等十分な検討を加えていきたい。

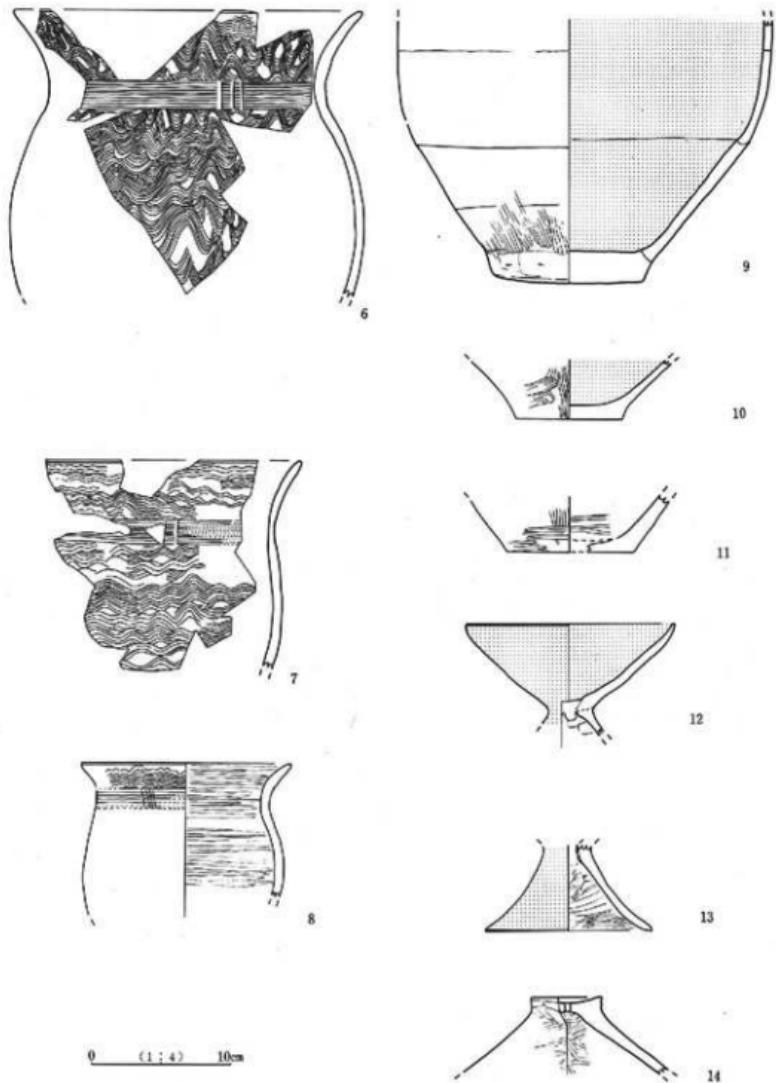
22-5は砂岩製の紡錘車であり、径4.9cmの円形を呈し、厚さ0.9cmで両面・周縁部とも平坦に磨かれており、ほぼ中心に6～7mmの片側からの穿孔と思われる一孔を有する。



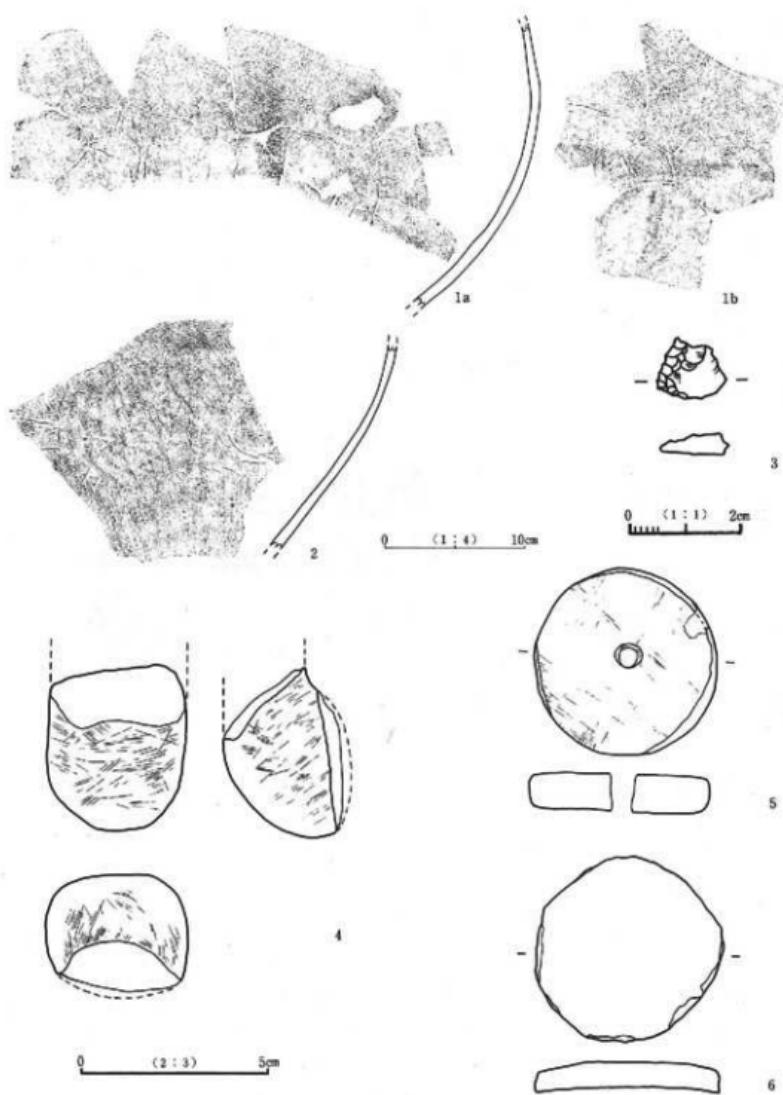
第19図 第2号住居址遺物分布及び接合関係図



第20図 第2号住居址出土土器実測図(1)



第21図 第2号住居址出土土器実測図(2)



第22図 第2号住居址出土土器拓影図及び石器・土製品実測図

第3表 第2号住居址出土土器観察表

器物名	器種	部位	法 種	成形及び縁形の特徴	調査 番	備 考
26-1	甕	口 底	25.0 36.8 9.6	口縁部は貼付け口縫で、瓶身は胴部平底にあり、擗削決を施す。	内) 口縫→瓶部まで横筋の非常に丁寧なヘタナダ。 外) 口縫部はヨコナダ。 文) ロー胴上半部全体に波状文が施され、その後波状文を削ぎすこよに6本単位の横擦削定波状文が腹部羽根に施されている。	回転束頭A 色調は内・外ともに赤茶褐色を呈する。 No.54・N区
26-2a	甕	口 底 胴上	(21.2) (18.2) -	口縁部は貼付け口縫。瓶底は丸張形をねび。底部はくびれを有す。 口縫部はやや外反する。最高径は瓶底中央にあると思われる。	内) 瓶底のヘタナダ。 外) 口縫部はヨコナダ。 文) 波状文は13本一周の2道止め右回りの横擦削定波状文。 口縫部は瓶底の瓶底直腹部。瓶底は羽次を呈する。 瓶底の斜面を波状文。	回転束頭B 外面上に異化物付着。2bと同一個体と考える。 No.24~10・15~20・71~73 P2+I区割・II区
26-2b	甕	胴上 底	- (28.0) 10.1	胴中央は丸突を有する。最大径は胴中尖部に位置する。	内) 脱中央より上に横筋のヘタナダ。瓶下部は瓶底のヘタナダ。瓶底は瓶底のヘタナダ。 外) 滑面を窺い、柄削工具を施した後、胴上部から脱中央部にかけて波状文を呈する直腹直底文。瓶下部は瓶底のヘタナダ。瓶底直腹部は瓶底のヘタナダ。	回転束頭A 外面上に異化物付着。外表面底部にヘタナダの前赤色斜面付着。2aと同一個体と考える。No.13・35・74~76・80~85 P2+P4・N区
26-3	甕	瓶 底	- (35.2) 8.8	瓶底がゆるやかにしきり、胴上部に最大径を有し、仕切の小さな底部に向けてすさまる。	内) 瓶底以上は瓶底の非常富士掌型ヘタナダ。瓶底は瓶底部へテナダ。瓶底は瓶底のヘタナダ。瓶底直部のヘタナダが複数である。 外) 瓶下部に於いてヘタナダの後擦削波状文。 文) 瓶底上半部に於いて6本単位の波状文(右回り)。	回転束頭A No.55・N区
26-4	甕	瓶 底	- (20.7) 7.6	瓶底は丸突を有し瓶底はくびれる。	内) 瓶底のヘタナダ。 外) 瓶底は3道止め右回りの横擦削波状文。瓶底直部は不規則な横擦削波状文。瓶下部は1段階のヘタナダ。	回転束頭B 内・外表面に赤茶色付着。No.55・60・62・63・P4・N区3層・II区床直
26-5	甕	底	- (4.6) 5.8		内) 底部から瓶下部は横筋のヘタナダ。 外) 底部から瓶下部は瓶底のヘタナダ。横擦削波状文。	回転束頭B No.54
26-6	甕	口 底 胴 中央	(24.6) (20.1) -		内) 瓶底のヘタナダ。 外) 口縫部はくびれなし。瓶底波状文の下部に白かつて横擦削波状文。瓶底直部に於いて横擦削波状文。瓶底は12本一周道止め右回りの横擦削波状文。	磁片束頭A 内面はヘタナダの時赤色顔料付着。No.23・27~30・M1・P4
26-7	甕	口 底 胴 中央	(29.5) (15.0) -	瓶底はくびれが小さく、口縫部はやや外傾きみに立ち上がり、最大径を口縫部に有す。	内) 瓶底のヘタナダ。 外) 4本から9本一周の乱れのある横擦削波状文。瓶底は11本一周道止め右回りの横擦削波状文。	磁片束頭B 外表面は磨耗著しい。No.50~57・T区・N区
26-8	甕	口 底 胴上	(14.0) (11.0) -	最大径を口縫部に有し、口縫部はやや細かい。	内) ヘタナダ。 外) 口縫部はヨコナダの後擦削波状文。瓶底は12本一周道止め右回り6段階ある右回りの横擦削波状文。瓶上部から瓶中央部まで横擦削波状文。	回転束頭A 内表面赤茶色付着。外表面は剥離著しい。P4・No.55
26-9	甕	底 瓶 底	- (18.7) 10.6	瓶底は丸みを帯び不安定である。瓶底において器厚の異なる部分があり、最終的な接合部分と考えられる。	内) ヘタナダが一部に剥離できるが、背面が荒れており界面が赤色顔料が施される。 外) 瓶底は瓶底のヘタナダ(右回り)瓶底ヘタナダ(下から上)。	回転束頭A 瓶底は良好。No.22~23・37~38~47~48~52~90~91・N区
26-10	壺	底	- (4.6) (7.6)		内) 磨耗著しいが、赤色塗装が施されていたことが看取できる。 外) ヘタナダ。	回転束頭B No.29
26-11	甕	底	- (3.6) (8.9)		内) 横位のヘタナダ。 外) 瓶底は瓶底のヘタナダの後底部側壁部に横位のヘタナダ。	回転束頭B 内・外表面に剥離著しい。No.35・36
26-12	高杯	杯	15.6 (7.0)	瓶底は「ハ」の字状に開くと思われる。その接合部はシケト式になっている。	内) 瓶底は丁寧なヘタナダ。赤色塗装が施されている。瓶底はヘタナダ。 外) 全体に丁寧なヘタナダが行われ。剥離及び剥落部外面は赤色塗装が施されている。	完全実測 No.58
26-13	高杯	脚	- (5.8) 11.8	瓶底は「ハ」の字状に大きくなっている。	内) ヘタナダが施されるが、瓶底の瓶底はヘタナダにより色塗装を剥離されるように見られ、その部分に赤色塗装が見られる。 外) 瓶底および横位のヘタナダ・赤色塗装が施される。	完全実測 No.69
26-14	蓋	天井	4.5~5.0 (<5.4) -	天井部は筒円にゆがむ。	内) 雜なヘタナダ。 外) ヘタナダ。	回転束頭B 内面底部に有機物がつかずか付着(黒色)。No.51・N区

以上、本住居址出土遺物には、弥生後期の様相をもつ赤色塗装の施された壺・高杯、櫛描波状文・縦状文の施された甕が出土しており、また、床面付近より出土した壺の調部片が、第1号住居址炉内より出土した胴部片と接合していることから、本住居址の所産期は、第1号住居址と近似期にあるものと思われ、弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えておきたい。

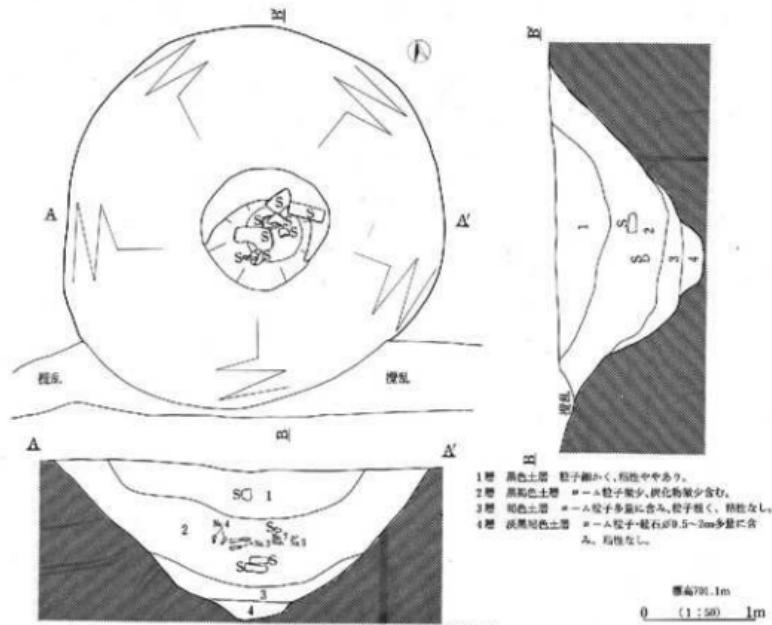
(三石)

第2節 土坑

1) 第1号土坑

本遺構は調査区東端あー2グリッドに位置し、全体層序第II層下部茶褐色土面で検出された。南端部上面は一部擾乱溝によって破壊をうけているものの、ほぼ全容を知ることができた。形態は上面径で340~345cmの円形を呈し、深さ140cmを測り、播鉢状を呈し下部で一段落ち込む。土層は4層に分かれ、第1層は黒色土層で、粒子細かく、粘性ややある。第2層は黒褐色土層で、ローム粒子・炭化物僅かに含み、この土層内より土師器・須恵器・獸骨(牛・馬骨)・石が主に出土した。第3層は褐色土層でローム粒子を多量に含み、粒子粗く、ばさばさとしている。第4層は淡い黒褐色土層で、ローム粒子・径0.5~2cmの軽石・小砾を多量に含む。

以上、土層において、土質・含有物から第1層と第2・3・4層とに分かれ、第1層は自然堆積、第2・3・4層は人為堆積の可能性が強いと思われる。



第23図 第1号土坑実測図

(1) 獣骨(牛・馬)の出土状態(第24・25図、図版七・八)

本土坑第2層上面より、馬・牛の上顎骨・下顎骨・頭蓋骨がばらばらの状態で、牛の距骨・踵骨・足根骨が接合した状態で、また牛の中足骨が1本単独で出土した。これらはいずれも白骨化しており、骨に人工的な刻み跡が認められなかった。尚、他の骨格の部位は検出されず、近年、発掘調査をされた、御代田町野火付遺跡D-16・17・18・19・20の検出状態とは異なるものである。

(2) 土器の出土状態及び遺物について(図版26図、図版十五・十六)

本土坑内の出土土器は第2層内検出の獣骨(牛・馬)の下部に敷かれた様な状態と、一部は散在した状態で出土した。土器については、図示し得たものが4点ある。他に、土師器甕底部、器肉厚い破片1点、器肉薄い破片1点。須恵器大甕底部破片1点、これは焼きがあまく黄色味をおびている。他に同一個体と思われる胴部破片3点、また、擬格子状のタタキ目の観察できる胴部破片1点が出土した。

土師器甕の26-1は、口縁部から胴上部のみで全器形は知り得ないが、やや球胴形の甕と思われ、口縁端部、僅かに隆起し内稜を有する。口縁部は「く」の字状に大きく外反し、胴部に比べ非常に器内厚く、2帯の粘土帯によって成形されている。外面調整は胴部下方より上方に向かって縦位のヘラケズリの後、口縁部のヨコナデが施され、内面はヨコナデが施されている。

土師器甕の26-2は箱形を呈し、内面底部周縁みこみ部に一条の沈線が施されている。外面調整は口縁部ヨコナデ、器体部から底部にかけヘラケズリが施され、内面はナデ調整の後、みこみ部から口縁部にかけ、放射状に暗文のヘラミガキが施されている。

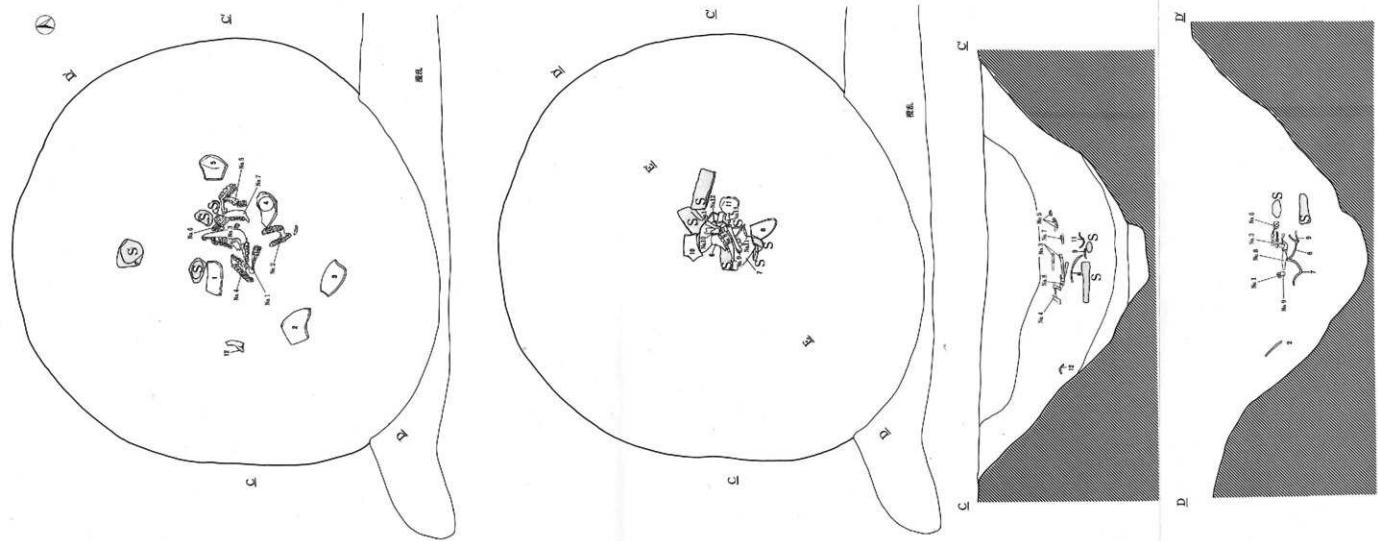
26-1・2は佐久地方に類例が少なく、川上村横尾遺跡にみられる甲州系甕・甕出土遺物の2次期前の甕・甕の特徴をよく有しております。佐久地方と山梨県との関連を示唆するものとして貴重な資料と言えよう。

26-3は須恵器小形甕で、口縁部短く直線気味に外傾し、口縁端部にロクロヨコナデにより1条の外稜を有し、胴中央部上部肩が張り出している。また、底部は一部のみ残存であるが、ヘラケズリが観察できる。

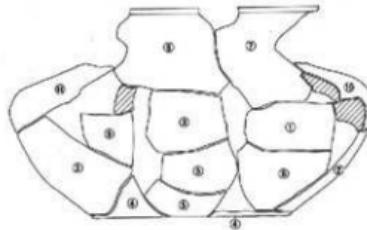
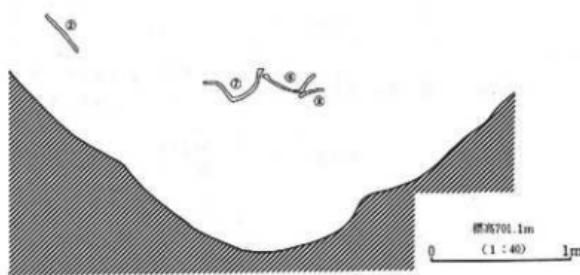
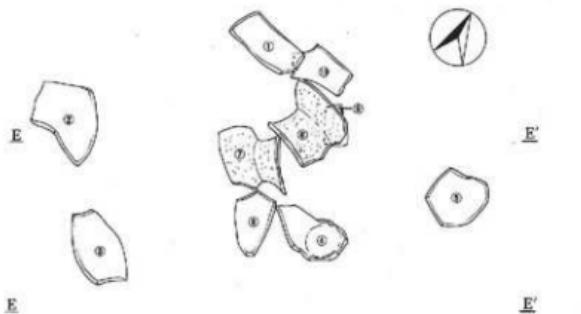
26-4は大形の須恵器広口壺で、頸部直立気味に立ち上がり、口縁部大きく外反する。口縁部段をなし、外稜を有し、肩部やや張り出し気味である。胴部はタタキ目が観察でき、一部擬格子目状のタタキ目が見られる。

尚、26-4は第25図第1号土坑遺物分布及び接合関係図に記載したとおり、接合した結果、ほぼ完形の形になったが、その出土状態は土圧により潰れたものとは考えにくく、人為的に割って埋めたものと考えられる。

その他、土器破片の下より、獣骨(牛・馬)、土器破片のあたかも台座の様な状態で、面取りを



第24图 第1号土坑遗物出土状况实测图



凡例：斜線で表わした土器片はI区、田区、山区から出土した。
点線で表わした土器片は表を示す。

0 (1:16) 10cm

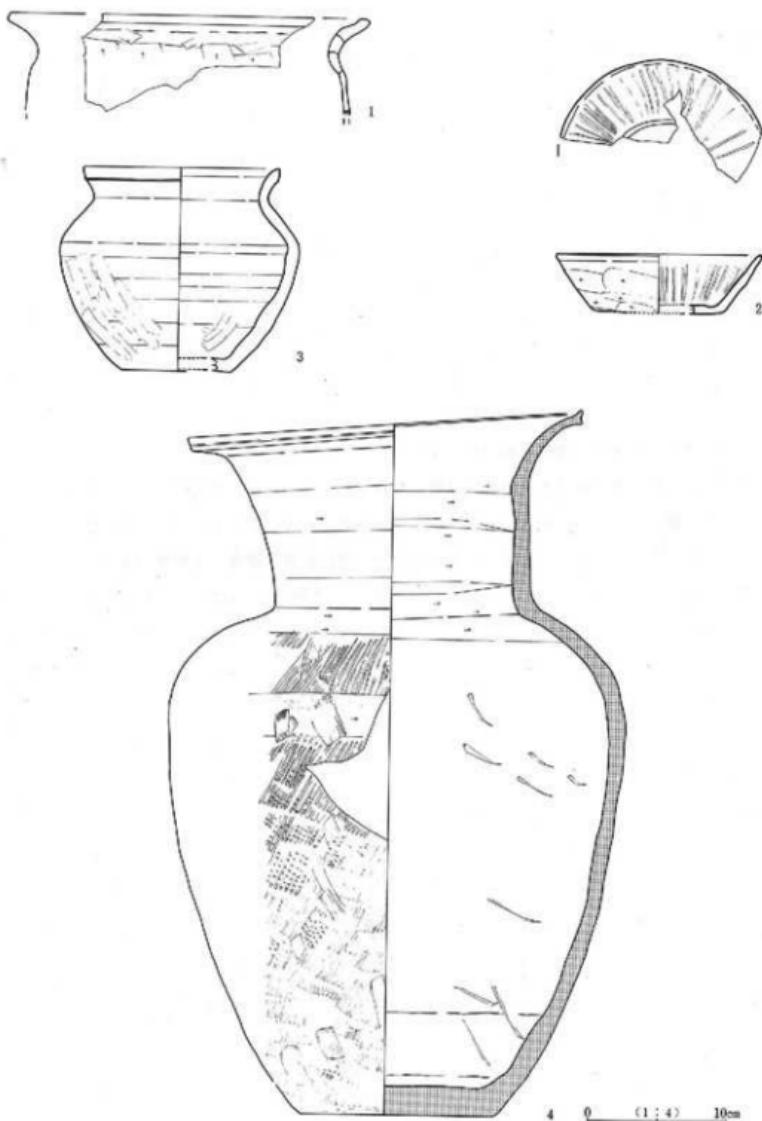
第25図 第1号土器遺物分布及び接合関係図

第4表 第1号土坑出土牛馬骨一覧表

No.	動物名	部位	出土状態	備考
1	馬	上顎骨	横転、第2層上面	年令1才前後乳歯から、永久歯に生え変わった状態(第4臼歯・永久歯に生え変わっている)。
2	馬	上顎骨	上向き、第2層上面	年令12才前後。
3	馬	下顎骨	横転、第2層上面	中形馬。全臼歯列長16.7cmでNo.2とセクトになる可能性あり。年令10才前後。
4	馬	上顎骨	横転、第2層上面	小形馬。全臼歯列長15.27cm、年令13~14才。
5	馬	下顎骨	横転、第2層上面	年令15~18才。歯の摩耗著しい。
6	牛	上顎骨	横転、第2層上面	小形牛。年令6才位、No.7、No.8と同一個体?
7	牛	下顎骨	横転、第2層上面	小形牛。年令6才位、右側No.6、No.8と同一個体?
8	牛	下顎骨	横転、第2層上面	小形牛。年令6才位、左側No.1、No.3の下より出土、No.6、No.7と同一個体?
9	牛	中足骨	第2層上面	No.1の下より出土、凹みに1~2mmの幅で溝がある。
10	牛	距骨	第2層上面	No.14、15、接合、後足右側。
11	牛	後肢基節骨	第2層上面	
12	?	眼孔付近の頭蓋骨	第2層上面	No.13と同一個体。
13	?	々	第2層上面	No.12と同一個体。
14	牛	踵骨	第2層上面	No.10、15と接合、後足右側。
15	牛	足根骨	第2層上面	No.10、14と接合、後足右側。

し、立方体の集塊岩が3個、握りこぶし大と頭大の整石、扁平な安山岩2個、頭大の安山岩の川原石が1個出土した。

以上、本遺構の所産期は土師器26—1・2、須恵器26—3・4から8世紀末から9世紀代と比定される。



第26图 第1号土坑出土土器实测图

第5表 第1号土坑山土器観察表

件番号	器種	部位	法量	成形及び断面の特徴	調査盤	備考
26-1	壺	口	(25.2) (6.8) —	口縁部から瓶頸にかけて比較的 手で二房の瓶上部により成 形されている。内面に刷毛はや や孤立気味に立ち上がり、模を 有する。	内) ロココナデ 外) ロ最終わら頭部にかけてロコナデ。その後頭部の調整部を削除す るかのように頭部に瓶頸のヘタキメが部分的に 造されている。ヘタキメの方向は下から上と考えられる。	横片実測B No.1 出土は3~5mm大の小石粒 を多少含んでいる。内面 は黄系褐色。外側は黒系褐 色及び黄系褐色を呈する。
26-2	壺	口 底	(14.4) (1.2) (9.2)	内面底部外周に四絞が観察でき る。	内) ロクニコナデ 外) ロクニコナデの後頭部ヘタキメが残されてい るが、移動方向は難解でなかった。底面はヘタキメ。 文) 内面において放射状に線文が施されている。	回転実測B 色調は内・外側が白黄褐色、 底面が黒色を呈する。I区
26-3	甕	口 底	(15.8) (14.4) (7.8)	口縁部は幅広く、肩部が張り底部の 底部に向けてすぼまる。肩部と底部 と脚部下において唇部の厚さが異なり 且上体の結合が考えられ。特に脚部 と底部では調整の跡痕が異なっている。	内) 外面ともにロココナデ。内面底盤においては 斜方へのハケメが観察できる。	回転実測B 色調は、内面底盤が青灰色、 を呈し内・外側に白地釉あり。 No.12
26-4	甕	口 底	28.0 50.2 13.8	瓶前から瓶底がゆがんでおり 内面の調整部が瓶頸より下方と異 っており、成形、追合した ことが考えられる。底部内面に 輪郭になる輪郭部分(「座合筋」 か?)が二箇所観察できる。肩 部が張っている。	内) 口縁部から肩部がロココナデ。瓶前から瓶底 にかけて腰部の底盤と考えられる部分が瓶底で、 その上からカーブしている。 外) 頭部から瓶底にかけて右に瓶斜してタタキメが造 られており、その後口底盤から瓶底にかけてタタ キメとロココナデにより再調整されている。尚、瓶底に いて一部で不規則なハケメ(?)が残されており、タタキ メも一部で崩落子目次を示すものが残られる。 タタキメは下方より造られたと考えられる。	回転実測A 内面底盤が青灰色、 それ以外は内外共に黒褐色を 呈する。 No.2 ~ 9・11 I区・III区・IV区

(3) 獣骨(牛・馬)埋葬と風習の一考察

本遺構の遺物出土状態は佐久地方には他に類例を見ないもの、埋葬するに当り人の選択する力が多分に働いたように思われる。第1に牛骨と馬骨のみで、しかも特定の骨格の部位であること、そして、下顎骨と上顎骨をばらしていること(他に距骨・踵骨・足根骨が1セット、中足骨が1本出土しているが)。つまり本体を何かに利用し、下顎骨・上顎骨等のみ埋葬したことが窺われる。第2に甲州系の土師器の出土は、この風俗習慣の伝播を知るうえで貴重な手掛りになると思われる。第3に牛・馬骨に伴って出土した土器は、供獻遺物とは考えられず、また、当時、日常庶民の使っていた土器であることから、支配・被支配の関係から行われた行事ではなく、一般庶民の伝承行事の様に考えられる。第4に文献を調べてみると、頌賛三代格巻第十九、禁制事、野事の所で應禁屠殺馬牛事と應禁殺牛用祭漢神事の二つの禁制が発布されており、逆説的に考えると、庶民の間では、この二つの事が盛んに行われていたことが窺われる。

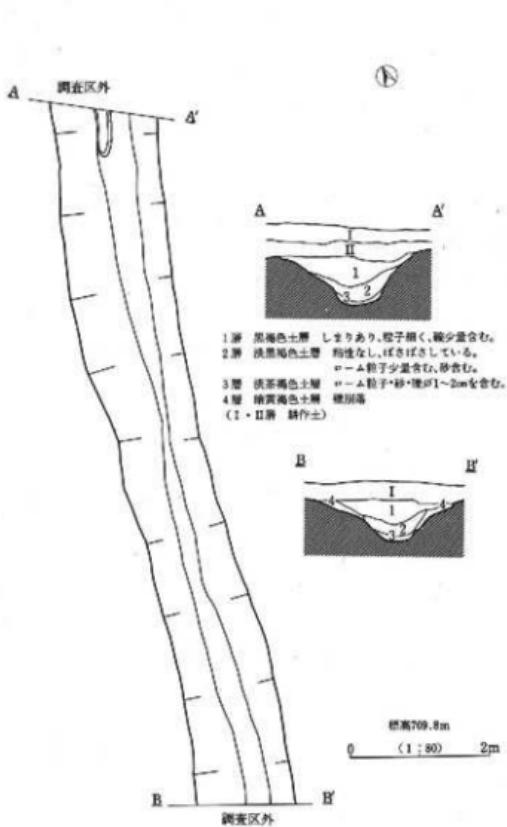
以上のことから、律令制度により、農耕を生産基盤とした中央集権国家が確立した当時において、庶民は気象現象に生活の影響を非常に受けた。また、中国を中心とした文化圏の中で、日本も大きく思想・信仰・技術・政治機構が唐風化する。その中で、中国では古来から牛馬を使った雨乞等、呪術的な農耕の祭りが盛んに行われ、それが朝鮮半島を渡り日本に伝播したか、あるいは直接(遣隋使・遣唐使等)伝播したものと推測される。

(羽毛田伸)

註1 長野県史刊行会猪沢氏の御教示による。

第3節 溝状遺構

1) 第1号溝状遺構



遺構・遺物

(第27図、図版六)

本遺構は第2号住居址中央部を南北に切っており、本調査区あー8、いー7・8グリッドに位置する。道路幅発掘のため全容を知り得ないが、全体層序第II層下部で検出された。上面で幅120~150cm、底面で10~50cm、深さ57~60cmを測り、断面形は緩いU字状を呈する。土層は4層に分かれ、第1層は黒褐色土層で、粒子細かく、しまりがあり、小礫を僅かに含む。第2層は淡黒褐色土層で、ローム粒子・砂粒を僅かに含み、土質はばさばさしており、粘性はない。第3層は淡茶褐色土層で、ローム粒子・砂粒・小礫(ϕ 1~2cm)を含む。第4層は暗黄褐色土層で流れ込みと思われる。

第27図 第1号溝状遺構実測図

以上のことより、僅かに水の流れた痕跡を留めるものの、空掘の状態で使用したものと考えられる。

遺物については、第2号住居址を切っているため、混入遺物として弥生土器が出土した。その他土師器片、須恵器片、灰釉陶器皿破片が出土しているが、いずれも本遺構の所産期を決定でき

る資料がなく、少なくとも第2号住居址より新しい時代の遺構である。

(羽毛田伸)

2) 第2号溝状遺構

1 遺構・遺物(第28図、図版六)

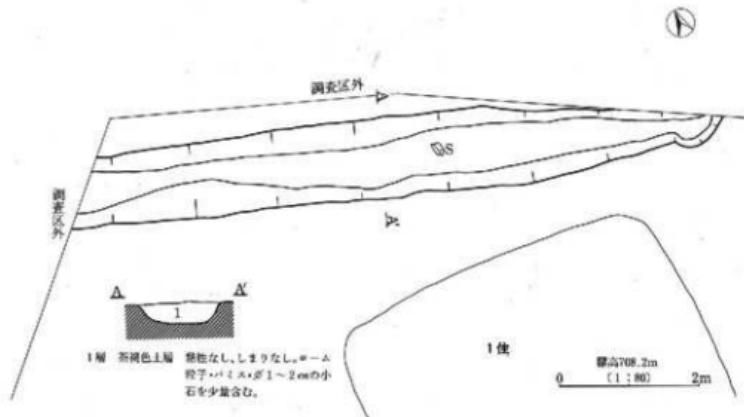
本遺構は、調査区北西隅いー12・13グリッド内に位置し、全体層序第III層黄褐色ローム層上面において検出された。他遺構との重複関係はなく単独で検出され、南側に隣接して第1号住居址が存在する。東側及び西側は調査区外であるため、一部分のみの検出であり、遺構の全容は把握できなかった。

規模は、検出部分で全長476cm、溝幅36~58cm、深さは16.5~47.5cmを測り、東西にはほぼ直線上に延びており、東端で終息あるいは北方に屈曲するものと思われる。

覆土は、ローム粒子・バミスを含む茶褐色土層1層のみで構成されており、断面形は、逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、東から西に向って徐々にレベルを低下させており、東端と西端との比高差は61cmを測る。

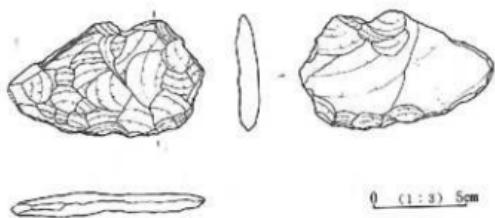
本遺構からは全く遺物が出土していない。従って本遺構の性格及び所産期は判然としない。

(三石)



第28図 第2号溝状遺構実測図

第4節 耕作土及び表採遺物について



第29図 耕作土出土石器実測図

池畠遺跡において、磁器片(染付茶碗)、陶器片(播鉢)、須恵器片、弥生土器片、縄文土器片等が出土したが、いずれも小片のため

- 1 図示できなかった。
29-1の横刃型石器は半
両面加工で石質は硬砂岩で
ある。

(羽毛田伸)

第V章 西御堂遺跡の遺構と遺物

第1節 土坑

遺構（第30・31図、図版十）

本遺跡からは、土坑が2基検出されたほかは、南北方向の搅乱溝と畑の耕作によると思われる搅乱が確認できただけである。

第1号土坑は、調査区西側B区中央付近に位置し、全体層序第III層黄褐色ローム層上面において検出された。他遺構との重複関係はなく、単独で検出された。

平面形態は、108×126cmの橢円形を呈し、底面周縁部にテラスを有し北側が深く窪む。深さはテラス部で6~20cm、最深部で28cmを測る。

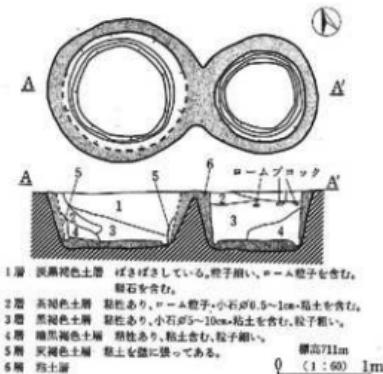
覆土は、テラス状の部分で2分され、上層はローム粒子・バミスを少量含む黒色土層、下層はローム粒子を多量に含む淡い茶褐色土層である。底面は凹凸が著しい状態である。

本遺構からは全く遺物が出土していないため、性格及び所産期は不明である。

第2号土坑は、調査区中央付近D区内南寄りに位置し、全体層序第III層黄褐色ローム層上面において単独で検出された。当初は性格・時期等不明であったが、地元の人の話により、肥溜であり戰前までこのような形態の肥溜が使用されていたということが明らかとなった。平面形態は、



第30図 第1号土坑実測図



第31図 第2号土坑実測図

径124cmと154cmのほぼ円形の土坑が2基並列した瓢箪形を呈し、深さは約60cmを測る。覆土は5層に分割された。第1層は淡い黒褐色土層で、ローム粒子を含む。第2層はローム粒子・粘土を含む茶褐色土層である。第3層は黒褐色土層で、0.5~1cm大の小石・ローム粒子・ロームブロックを含む。第4層は粒子細かく粘土を含む暗黒褐色土層である。第5層は灰褐色粘土層で壁に張った粘土の崩落と思われる。断面形は逆台形を呈する。

構築順序としては、地表面から桶よりやや大きく円形垂直ぎみに掘り込み、底面を平坦にした後、底面に軟質な粘土を張る。桶を底面に設置し、さらに掘り込んだ側面と桶との隙間に桶の歪による漏れを防ぐための粘土を入れ固める。また2基がセットとして使用された理由としては、糞尿をある期間溜めておき腐敗させ、肥料としての効用をもたせるため交互に使用したものと思われる。

出土遺物は、染付茶碗が2片出土したのみである。

(三石)

第VI章 調査のまとめ

今回、池畠遺跡と西御堂遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、池畠遺跡で住居址2棟、土坑1基、溝状遺構2基、西御堂遺跡で土坑2基である。

一方、出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、石製品、土製品、牛馬骨等がある。

以下、今回の調査において検出された遺構・遺物を中心としてまとめを行っていきたい。

第1節 遺構

今回の調査で、弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えられる住居址が2棟検出された。いざれも調査区西寄りに位置するが、今回の調査は幅約10mという限られた範囲での調査であるため、遺跡の存在する台地上に東西にトレンチを入れたことに等しく、台地全体における遺構の分布等を把握するには至らなかった。

池畠遺跡において検出された2棟の住居址はそれぞれ規模・形態が異なり、第1号住居址は長軸552cm、短軸465cmで短軸と長軸の比が1:1.19の南北にやや長い隅丸方形で、第2号住居址は長軸764cm、短軸478cmで短軸と長軸の比が1:1.6の南北に細長い特徴のある隅丸長方形である。長軸方位は、わずかに西を向くがほぼ北方向を示す。

覆土は、いざれも自然堆積の層序を示しており、黒褐色土層、黑色土層、茶褐色土層が主体となっている。

住居址内ピットは、いざれも主柱穴は4個で、上部にテラス状の部分を有し、断面形は有段の「U」字状を呈する。両住居址とも覆土はこの段部で2層に分割され、上層は黒褐色土層、下層はローム粒子を主体とする淡い黄褐色土層である。貯蔵穴と思われるピットは2棟とも検出され、第1号住居址は南壁直下西寄り、第2号住居址は南東隅に位置する。また入口施設に關係あると思われるピットも南壁下中央付近より検出された。

炉址は、第1号住居址ではP₁とP₂の柱穴間に位置し、第2号住居址は住居址のほぼ中央に位置しており、いざれも地床炉である。

現在までの佐久地方における弥生時代終末期の住居址の調査例は、小諸市久保田遺跡Y2・3号住¹、佐久市下小平遺跡Y1～5号住²がある。久保田遺跡の住居址形態は、Y2住が南北609cm東西600cm、Y3住が南北515cm、東西507.5cmを測り、いざれも短軸と長軸の比が1:1.01の方形を

第6表 池畠遺跡住居址一覧表

遺構名	検出位置	平面プラン						床面積	腰廻高	長軸方位	炉	ピット	時期	備考							
		形態		規 模		整 長															
		長軸	短軸	東壁	西壁	南壁	北壁														
1住	い-12 う-11 12	隅丸 方形	cm 552	cm 465	cm 502	cm 554	cm 434	cm 420	m ² 25.1	cm 24~ 54.5	N-7°-E	柱穴間 地床炉	主柱穴 4 貯蔵穴 1 爐 1	弥生終末 古墳初頭							
2住	い-8 う-7 8	隅丸 長方形	cm 764	cm 478	cm 730	cm 734	cm 418	cm 418	m ² 35.6	cm 34.5~ 58.5	N-3°-E	中央 地床炉	主柱穴 4 貯蔵穴 1 爐 2	弥生終末 古墳初頭	第1号溝状 造構により 中央を南北 に切られる。 北東隅わざ かに未調査。						

量し、また、下小平遺跡Y 1・2・4号住は南北873~942cm、東西537~582cmを測り、短軸と長軸の比が1:1.6の隅丸長方形を呈し、Y 3号住は南北550cm、東西460cmで短軸と長軸の比が1:1.19の南北にやや長い隅丸方形である。

第1号住居址は、住居址規模・形態において下小平Y 3住と近似した数値を示しており、また炉が北側柱穴間に位置すること、貯蔵穴が南壁直下に存在することなど類似点が多く認められ、第2号住居址は、下小平Y 1・2・4住と比較してやや小形ではあるが、短軸と長軸の比が1:1.6の隅丸長方形を呈し、貯蔵穴が下小平Y 2住と同様に南東隅に位置するなどの類似点がみられ、時間的近似期にあるものと考えられる。さらに、第1号住居址炉内より出土した壺胴部片と、第2号住居址東壁下床面付近より出土した胴部片が接合関係をもっており、何らかの関連性があるものと思われる。第2号住居址の炉址は、住居址のほぼ中央に位置するが、当初本住居址は2基の炉を有しており、北側柱穴間に位置していた炉址は第1号溝状造構によって破壊され、中央の炉址のみが残存しているという可能性も指摘できることを付しておく。また本住居址の炉址は、深さ約47cmと深く掘り凹めてあり、佐久地方においては初見と考えられる。尚、石部正志氏は、地床炉と意識的に深く掘り凹めた竪穴炉とを区別しているが、本炉址が竪穴炉として捉えることができるものであるかが不明であるため、一応地床炉と考えておきたい。

弥生時代終末期における住居址形態は、第1号住居址、久保田Y 2・3号住、下小平Y 3号住にみられる隅丸方形と、第2号住居址、下小平Y 1・2・4号住にみられるような短軸と長軸の比が1:1.6と大きく、南北に長い隅丸長方形の2形態がみられ、さらに、更級郡上山田町御屋敷遺跡において、森崎稔氏により、竪穴住居址のプランについて、後期箱清水式期の住居址は7×5mの長方形で、弥生時代終末期から古墳時代最初頭御屋敷期の住居址は5×5mの小形の方形であり、やがて8×8mと大形の方形住居址になり、古墳時代前半期の住居址は6×5.5mの短長方形になるというように時期によってプランの変化がうかがえる。という指摘がなされており、

大略的には、弥生時代後期の長方形の住居址から、古墳時代の方形の住居址への推移を想定している。今回、調査の行われた2棟の住居址は、その過渡的様相を示すものと考えられ、弥生時代後期的な長方形の住居址と古墳時代的な方形の住居址の2形態が共存している点で注目される。

佐久地方における現在までの該期の調査例は少なく、今回検出された2棟の住居址は、今後、弥生時代から古墳時代への変遷を考究する上での貴重な資料といえよう。(三石)

第2節 遺物

池畠遺跡は道路新設に伴う調査のため、遺跡の全容が判明できず、主な造構として住居址2棟と土坑1基を検出しただけであった。そのため器種構成も極めて貧弱であるが、第1号住居址出土の12-1の無彩土器の高杯は、弥生時代終末期から古墳時代初頭を示す土器として貴重な遺物といえ、第2号住居址からの多量の變形土器の出土も特筆されよう。また、第14図第1・2号住居址間接合関係関連図で示した様に、第1号住居址炉内出土の壺破片と第2号住居址内出土の壺破片が接合関係にあることから、速断はできないものの両住居址の所産期は同時期または時間的近似期を示す可能性があるといえる。

尚、第1号土坑出土の牛馬骨と土器については前述してあるので、今後、第1号土坑の様な類例の増加を期待し、本造構が民俗の風習・習慣を知るための基礎的なものになればと考える。ここでは弥生時代終末期における壺の分類を、本造構出土の壺を中心に行ってみた。

口縁部形態

I	素口縁	21-6・7・8
II	貼付口縁	20-1・2

胴部最大径の位置

A	胴中央下部（球状を呈する）	20-1・21-6
B	胴中央部	20-2・4
C	胴中央上部	20-3

文様形態

頸部櫛描簾状文

X	ある	20-2・4
Y	なし	20-1・3

胴部

E	櫛描斜走直線文（横位羽状）	20-2、22-1'a・b
F	櫛描波状文	

F₁………振幅が小さく、帯としての単位がはっきりしているもの。

20-3

F₂………振幅が小さく、単位も不揃いで乱れているもの。

20-4, 21-7・8

F₃………振幅が大きく、帯の意識が薄れ、波状文が多く重なりあうもの。

21-6

G………櫛描波状文の上に櫛描斜走直線文（横位羽状）を施文

20-1

以上のことから、器形において一定の傾向がみられず、弥生時代後期（箱清水式土器）的様相の甕と、次期につながる球胴形の甕とが共存している。文様は弥生時代後期の様相の櫛描文が施されているが、弥生時代終末期の様相の器形の小形化と施文の亂れを有するF₂が共存している。Gであげた20-1は特筆するもので、櫛描波状文を口縁部から胴中央部に施した後、これを消す形で横位羽状の櫛描斜走直線文が施文されている。このことは時代の過渡期におけるデザインの混雑化現象とも考えられ、良好な例と思われる。尚、Gとは目的意識の上で異なるもので、佐久地方では波状文と斜走直線文が同じ甕の中に併用して施文された例としては清水田遺跡出土の甕があげられる。從来、佐久地方では弥生時代後期の土器において、櫛描斜走直線文・貼付口縁は比較的古い要素の土器とされていたが、再検討を促す資料となるであろう。

尚、20-3, 21-6・8等にみられるように、内面ヘラナデ痕に赤色顔料の付着が観察できることは、調整器具に赤色顔料が付着していたことをもののがたり、弥生土器にみられる赤色塗彩の方法を知る上で一つの示唆になると思われる。21-9・10の甕の内面全面に赤色塗彩の施されていることは、從来、当地方の弥生時代後期の甕には観察されず、使用目的のためか、甕の櫛描文同様、デザインの混雑化によるものか、今後の資料の増加を待って、検討を行っていただきたい。

第1号住居址出土の12-1無彩の小型高杯は、弥生時代終末期から古墳時代初頭への変遷を考える上で指標となり得るものと思われ、千曲川流域においてこの小型高杯と同じ所産期と思われる遺構としては、小諸市久保田遺跡Y2・3号住居址と第1・2号円形周溝墓、更級郡上山田町御屋敷遺跡Y1・4号住居址等があげられる。この小型高杯が出現する時期は、畿内・濃尾地方に古墳文化が形成される時期と考えられ、その影響によって外來系の土器が当地方にもたらされた可能性が強いものと思われる。従って12-1は外來系土器として、花岡弘¹⁷⁾、比田井克仁両氏も述べているように、畿内から東海西部（元屋敷式）に、それから東海東部・関東へ、さらに長野県には天竜川を通り、千曲川流域に入ってきたものと考えられる。

尚、昭和55年度発掘調査された下平原遺跡の第1～4号住居址より出土した要形土器に類似した点が観察され、その所産期の再検討を提示する資料となることも付記しておく。（羽毛田 伸）

註 1 小諸市教育委員会 1984 「久保田」

註 2 報文中においては、口縁部が有段をなす壺について、「本遺跡の主体をなす箱清水式壺の壺は、壺Aにおいて笠沢氏のいわれる吉田式壺D1・D2類に強い類似性をもち、……」とし、また壺については「壺の有段口縁及び内窓する口縁とその部位に波状文を施す要素が中期末及び吉田式からの、また、壺の文様斜次文を同様にとらえるならば……」として、壺A及び甕の斜走直線文（斜状文）を古い要素としているが、壺の球頭形を呈する脚部は新しい様相を示しており、また本遺跡を見る限り、甕の斜走直線文は、弥生中期から終末期及び古墳時代初頭まで継続する可能性が強いと考えられ、さらにY3住内には、小型丸底壺とともに考えられる土器も共存していることを勘案するとY1～5住の所産期は、本遺跡第1・2号住居址と同様、弥生時代終末期から古墳時代初頭と考えるのが妥当であろう。

註 3 石部正志 1974 「考古学からみた火」（『日本古代文化の探求 火』）

石部正志により、堅穴炉は「東面を20～30cm以上、直径0.5～1m掘り凹めただけの炉であり、周辺に自然石や石皿・四石が散在したり、埋甕が置かれたりしているケースが多い。」という指摘がなされている。

註 4 齋藤 徳 1978 「第三章 弥生時代」（『更級城科地方誌 第二巻 原始古代中世編』）

1982 「御壁敷遺跡」（『長野県史 考古資料編』全1巻〔2〕）

註 5 百瀬新治 1981 「3櫛推文」（『箱清水式土器』）

註 6 田代武正 1980 「佐久地方出土の後期弥生式土器について」（『信濃』第三次第32巻第4号）

註 7 花岡 弘 1986 「土師器の成立と古墳時代」（『歴史手帖 2』）

註 8 比田井克仁 1980 「古墳発生時における小型高杯について」（『金鏡 22』）

引用参考文献

御代田町教育委員会 1985 「野火竹遺跡」

川上村教育委員会 1983 「横尾」

小諸市教育委員会 1984 「久保田」

飯田市教育委員会 1986 「飯田遺跡群」

長野市教育委員会 1980 「四ヶ屋遺跡、鹿間遺跡、臨崎遺跡群」

佐久市教育委員会 1981 「下小平遺跡」

佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター 1986 西裏遺跡群〔西裏・竹田峯〕

群馬県桐生市建設部・教育委員会 1984 「B4 株木遺跡」

山梨県考古学協会 1986 「山梨考古学論集 1」

平安学園考古学クラブ 1966 「陶邑古墳址群 1」

千曲川水系古代文化研究所 1980 「福年」

1981 「箱清水式土器」

- 森 浩一 1978 「大化海葬令の馬の拘役について」(『古代史論叢 上巻』)
- 朝原 健 1981 「新井原遺跡免見馬塗の性格」(『伊那』第29巻第6号)
- 堤 隆 1986 「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」(『信濃』第三次第38巻第4号)
- 高谷重夫 1982 「雨乞習俗の研究」
- 金子浩昌 1984 「貝塚の歯骨の知識」(人と動物とのかかわり) (『考古学シリーズ』10巻)
- 土屋長久 1970 「信濃長倉牧址にある上代牧場遺跡」(『長野県考古学会誌(9)』)
- 1973 「信濃国塙野牧遺跡」(『佐久考古(1)』)
- 1975 「信濃古牧の成立とその性格」(『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』)
- 一志茂樹 1945 「清水駅址考」(『信濃』第一次第4巻第9号)
- 1949 「清水駅址考」(『信濃』第三次第1巻第5号)
- 1969 「古代馬製路について」(『信濃』第三次第21巻第10号)
- 大參義一 1968 「弥生式土器から土器類へ東海地方西部の場合」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』)
- 比田井克仁 1980 「古墳発生時における小型高杯について」(『金鏡』22)
- 1983 「古墳時代前期高杯考—南関東地方を理解するために」(『古代』74号)
- 1984 「II 東京都」(『古墳時代土器の研究』)
- 1985 「弥生時代高杯考—南関東地方を理解するために」(『古代探査』II)
- 宮本晋郎 1965 「小型高杯の一考察—北九州における小型高杯形土器の出現と変移についての基礎的考察—」
(『石川考古学研究会会誌』)
- 花岡 弘 1986 「土器器の成立と古墳時代—古代信濃の編成過程を語る—」(『歴史手帖』2)
- 佐原 真鑑 1983 「弥生土器 I・II」
- 白田武正 1980 「佐久地方出土の後期弥生式土器について」(『信濃』第三次第32巻第4号)
- 青木和男 1964 「善光寺平南城における古墳出現期の集落出土の土器」(第5回三県シンポジウム「古墳出現期の地域性」)
- 林 幸彦、花岡 弘 1980 「弥生時代の初—千曲川流域を中心として—」(『信濃』第三次第35巻第4号)
- 石部正志 1974 「考古学からみた火」(『日本古代文化の探究 火』)社会思想社
- 森鶴 稔 1978 「第三章 弥生時代」(『更級塙科地方誌 第2巻 原始古代中世編』)更級塙科地方誌刊行会
- 1982 「御殿敷遺跡」(『長野県史 考古資料編』全1巻(2))

付 編

長野県佐久市池畠遺跡出土の馬と牛の骨について

前橋第二高校

宮崎重雄

I はじめに

池畠遺跡の第1号土坑から5個体分の馬歯・馬骨と1個体分の牛歯と牛骨が出土した。第1号土坑は、「すりばち」状の掘り込みで、上縁部の径が3m40cm、深さが1m20cmほどあり、歯骨類は土坑の中心部の深さ57~82cm、径80cmの範囲内に埋存していた。伴出した土器片から、歯骨類の時代は8~9世紀頃（奈良時代の末から平安時代の始め）と考えられている。馬と牛の骨が古代の遺跡から伴出することはめずらしく、これまで大阪府四条畷の古墳の石室内からの出土例を知るのみである。

本報告で用いた解剖用語は、主に日本歴医学会（1978）により、計測法は主にDuerst（1926）²⁾にしたがった。主として用いた計測器具は三量製の1/20mmのノギスを使用した。また、臼歯の咬合面の名称は長谷川他（1979）³⁾によった。

II 記載

1) 馬歯・馬骨について

出土したのは上顎3個と下顎2個であるが、上下顎骨が咬み合っているものではなく、個々ばらばらの状態で埋存していた。大きさ、咬耗度、咬合面の形態などから、この5個の顎骨はそれぞれ別個体に属するものと考えられる。ただし、2号馬と3号馬とは計測値と咬耗度が近似し、同一個体に属する可能性も多少は残っている。体幹骨、四肢骨は出土していない。これらの事情は上下顎骨を人工的に切り離したか、死後一定時間経過し、腐敗分解が進んで、上下顎骨が分離した段階で、上顎あるいは下顎のどちらかを持ってきて埋めたように思える。これが、いわゆる再葬なのか、呪術的なものなのか、あるいは単なる遺体の再処理なのかは、現段階では明らかではない。

a) 1号馬（第2・3・4表）

左右の上顎乳臼歯6個、同臼歯10個、切歯3個、歯槽突起破片

咬合面を上に向かた状態で埋存していた。乳臼歯が左右とも第二乳臼歯から第四乳臼歯まで残存するが、左右とも第二乳臼歯の後葉部が欠如している。右側でみてみると、歯冠高が第二乳臼

歯で12.2mm、第三乳臼歯で13.0mm、第四乳臼歯で19.4mmとかなり小さく、咬耗が進んでいるが、咬合面のエナメル褶皺が消失してしまうほどまでにはいたっていない。どの乳臼歯も、舌側歯根が大きく舌側に張り出している。乳臼歯の歯根部には吸収窩が見られ、歯槽突起内には永久歯のぞいていて、歯の交換期の近いことを示している。左右とも、第一大臼歯はすでに萌出し、咬耗のごく初期にある。第二大臼歯は萌出途上にあり、咬耗は受けない。第三大臼歯は形成されている痕跡はない。このような換歯の状況から、本馬の年令は1才数ヶ月と推定される。性別は知る手がかりがない。

本馬と、群馬県吉岡村大久保A遺跡出土の平安時代馬の乳臼歯⁵³とを比較してみると、歯冠長で、第三乳臼歯が2.7mm、第四乳臼歯で3.9mmと本馬の方が小さいが、歯冠幅では、逆に第三乳臼歯で2.0mm、第四乳臼歯で3.0mmと本馬の方が大きい。すなわち、第3表の歯冠の幅率にも表われているように、本馬の乳臼歯は大久保A遺跡出土の乳臼歯ほど細長い形をしていないのである。次の現世のサラブレッドと比較してみると、歯冠長で、第三乳臼歯が2.1mm、第四乳臼歯が1.8mm、歯冠幅で、第三乳臼歯が1.6mm、第四乳臼歯が2.1mmといずれも本馬の方が小さい。すなわち、歯冠長、歯冠幅とも本馬の方がかなり劣っているが、幅率では両乳歯とも近似した値を示しており、本馬は、ほぼ同時代の群馬の馬より現世サラブレッドの方に類似した形状を示している。このことはエナメル質の形状についても言える。

本馬の第一大臼歯は咬合面近くで歯冠長、歯冠幅が増すマッチ棒状を呈しており、咬耗が始まつたばかりである。第二大臼歯はまだ萌出途上にあり、咬合面も外部セメント質に完全に覆われている。この歯も咬合面近くでわずかに歯冠長が増している。

切歯は、まだ咬耗を受けていない左右の上顎第一切歯と右上顎第二切歯が採集されている。

なお、本馬のものと認定される下顎骨および下顎の歯は1片も採集されていない。

b) 2号馬（第1・2表）

左右上顎臼歯12個、左上顎第一切歯1個、右同第三切歯1個、口蓋突起破片

2号馬は前述の通り、3号馬と同一個体である可能性をわずかにもっているものである。犬歯が発見されていないが、もともとそれが無かったのか、風化などのため消失してしまったのか判断できないため、性別は不明である。年令は切歯の咬合面の形状および臼歯の咬耗度から12才前後と推定される。

臼歯列の咬合面は、ゆるやかにごくわずか下顎側に凸彎しているだけで、正常な咬耗をしている。臼歯の形態で特筆されているのは、左右の上顎第三大臼歯の後小窩(postfossette)がエナメル褶皺で囲まれているのではなく、遠心側へ開いて内彎状を呈していることである。群馬県の大久保A遺跡でも同様の上顎第三大臼歯が出土しているが、これが単なる個体変異なのか、当時の馬に見られる系統的なものなのか、あるいは別の要因によるものなのかは、今後の資料の増加を

待って検討していきたい。

本馬の上頸全臼歯列長は、第二前臼歯が破損しているために、やや正確さに欠けるが、166mm前後である。これは日本の中型在来馬の木曾馬の平均値⁵⁾173.2mmを大きく下回るもの、同じ中型在来馬の御崎馬の163.8mmをまわざかに上回る。⁷⁾

また、ほぼ同時代の他遺跡の馬と比較してみると、本馬の166mmは、群馬県の平安時代馬の十三宝塚馬の169.4mm⁵⁾や同県大久保A遺跡2号馬の169.4mm⁵⁾よりは小さく、長野県の平安時代馬の野火付4号馬の166.2mm⁸⁾にはほぼ匹敵している。

c) 3号馬(第1・2表)

左右下顎臼歯12個、切歯3個、犬歯1個、下顎骨片

咬合面を上に向けて埋存していた。歯冠基部の最大径が $11.8 \times 10.8\text{mm}$ の犬歯が検出されたことからオスと判断される。どの切歯も咬合面近くが大きく破損しているために、細かな年令の決定はできないが、歯の咬耗度および切歯の咬合面の形状などから、ごく大ざっぱな推定で10才前後が予想される。

下顎の全臼歯列長は167.2mmで、中型在来馬の御崎馬の平均値167.2mm⁷⁾に等しい。しかし、木曾馬の最小のものの168.0mm⁹⁾にはおよばない。また、小型在来馬のトカラ馬の157.0mm²⁾よりははるかに大きい。

上信地方の平安時代馬と比較してみると、群馬県の十三宝塚馬の172.0mmや大久保AのOAII2号馬の173.0mm⁵⁾よりは小さいものの、大久保AのOAII1号馬の155.6mm⁵⁾や長野県の野火付1号馬の161.0mm⁸⁾、2号馬の165.5mm⁸⁾、3号馬の163.0mm⁸⁾をいずれも上回り、この頃の馬としては大きい方であったといえよう。

d) 4号馬(第1・2表)

左右上顎臼歯12個、齒槽突起破片

咬合面を南東方向に向けて埋存していた。性別を知る手がかりはない。年令は臼歯の歯冠高すなわち咬耗度から大ざっぱに判断して13~14才が予想される。咬耗は比較的正常に進行している。第三後臼歯の咬合面では、後小窓(postfossette)を取りまくエナメル褶皺が閉じていて、本遺跡の2号馬のように遠心側へ開くようなことはない。本馬は、152.7mm⁶⁾というだいぶ小さい上顎全臼歯列長で、朝鮮の小型在来馬である濟州島馬の151.0mm¹⁰⁾にはほぼ匹敵する。もちろん日本の中型在来馬である木曾馬や御崎馬のそれよりはるかに小さい値である。^{6), 7)}

上信地方の既知の平安時代馬で、本馬の全臼歯列長を下回るものはないが、近世~近代初頭のものでは本馬より小さい計測値を示すものが2例だけあり、1つは群馬県高崎市の下佐野2号馬の146.0mm¹⁰⁾であり、もう1つは同市中尾馬の141.0mm¹¹⁾である。いずれにしても本馬は近世以前馬としては小さい方であるといえる。

e) 5号馬（第1・2表）

左右下顎臼歯10個、下顎歯槽骨破片

咬合面を南東方向に向けていた。犬歯の存在が確認されず、性別は不明である。臼歯の咬耗がだいぶ進み、その歯冠高の値から15~18才程度の大ざっぱな年令推定ができる。咬耗の異常が激しく、咬合面が大きく波打っている。第一大臼歯の咬合面は齒軸に対して70°ほど近心側へ傾き、第二大臼歯のそれは60°ほど遠心側へ傾いていて第二大臼歯の下原錐(Protocenid)と第一大臼歯の下内錐(entoconid)が下顎の咬合面の最頂部をなしている。他に第四前臼歯では下後錐(metacoenid)と下後附錐(metastyloid)が、第三前臼歯では下後附錐が高くなっている。この状態は左右の臼歯列ともだいたい同様である。注目されるのは、左の第四前臼歯の咬合面で下後錐谷(metaflexid)が近心側に開かずにエナメル質が径 $6.1 \times 2.4\text{mm}$ の橢円形に閉じていることである。これは咬耗が極端に進んだ結果生じたものなのか、この個体特有のものなのかは不明である。

本馬の第二前臼歯を除く、全臼歯の齒冠長の和は114.8mmで、現世小型在来馬のトカラ馬のそれの127.0mm¹²⁾を12.2mm下回る。このことで本馬が体高110cm弱のかなり小型の個体であると理解できる。このような小型馬は、御代田町野火付遺跡出土の平安時代馬に一頭も見られないし、全国的に公表されているものを筆者は知らない。小型馬は体高が低いので、荷が背に乗せやすく、駄馬として用いられたようだから、本馬もそのように使役されたものであろうが、老令にいたるまでよく使役に耐えられたものである。

2) 牛歯・牛骨について

牛は、BC7000年頃、西アジアのアナトリアあたりで家畜化されたといわれるが、確かなものは6000年前まで下る。¹³⁾日本への渡来は弥生文化期以後と推定され、水田稲作農耕の渡来とはほぼ時代を同じくしている。しかし農耕用の役畜として渡來したのかどうかは明らかでない。8世紀頃の奈良時代には唐から犂が輸入され、水田の耕作に犂が用いられている。また平安時代初期に刊行された「延喜式」には、信濃国など22ヶ国から蘇(牛乳製品の一種)が貢納されていることが書かれたり、全国的な牛の飼育が認められる。¹⁴⁾牛の飼養目的は上記のように農耕、食料の他に祭祀、交通などがあり、牛を殺して神を祭ったり、平安時代初期からは牛車の輦用にされたりした。¹⁵⁾

古代の牛の形態は、現在山口県萩市の見島牛や鹿児島県の口之島牛にしのぶことができる。見島牛は、メスの体高が116cmほどで、黒毛和牛のメスの平均125cmよりだいぶ小さい。またその遺伝子構成が南鮮牛に類している。現代の黒毛の和牛は、明治以来欧米諸国からいろいろな品種のウシが輸入され、在来牛に交雑されたものに中國地方を中心に選択淘汰と近親交配が重なって成立した品種である。¹⁶⁾

これまで長野県の古代遺跡で牛の骨が出土した例は塩尻市の平出遺跡であるが、土師文化期の

ものである可能性はあるものの、年代決定は相当困難とされている。また出土部位も歯に限られている。¹⁷⁾

その点、本標本は8～9世紀頃のものであることにはほぼ間違いない、出土部位も上顎骨および下顎骨とはほぼ完全な中足骨など足根骨、指骨が出土していて、古代牛の形態を知る上で貴重な資料と言えるものである。

記載（第5・6・7・8・9・10・11表）

左右上顎骨破片と臼歯12個、左右の下顎骨破片と臼歯12個、左蹠骨、同距骨、同第四中心足根骨、同中足骨、左内側基節骨、同中節骨各1個

上顎の臼歯の大きさについて第5表でみると、本牛は後臼歯列長が82.1mmあり、朝鮮牛にはほぼ等しく、九州牛よりはやや大きい。静岡県の長岡弥生牛をもわずかに上回っている。塩尻市の中出遺跡の牛と後臼歯の歯冠長の和で比較してみると、上顎で本牛は83.4mmあり、中出遺跡の79.5mmをだいぶ上回っている。下顎では89.3mmあり、静岡県長岡弥生牛の87.6mmを少ししのいでいる。

次に下顎の全臼歯の歯冠長の和で比較してみると本牛は143.3mmあり、やはり139.5mmの長岡弥生牛を上回っている。しかし、下顎の歯冠幅では、第二前臼歯を除きどの歯も長岡弥生牛より小さな計測値を示している。また上顎の歯冠幅でも平出土牛のそれを下回っていて、池畠牛は歯冠長のわりに歯冠幅の小さい牛であるといえる。

下顎の体高では、いずれの計測値も長岡弥生牛より小さいが、埼玉県皆野町の土師文化期牛のそれよりわずかながら大きい。¹⁷⁾

最後に中足骨の比較について述べる。本牛の中足骨最大長は、現世の在来牛である見島牛3例のいずれよりも大きく、また黒毛和牛のメスをもわずかにしのいでいる。しかし黒毛和牛のオスよりはだいぶ小さい値である。本牛の特徴はその他に、近位端の最大幅が比較的小く長幅率（ $\frac{\text{骨体中央幅}}{\text{最大長}} \times 100$ ）も11.27と第8表の比較表のなかでは4番目に小さい値である。

結局のところ、本牛の中足骨は現世黒毛和牛のメスに最も近い大きさをもっており、ごく大ざっぱな推定で125cm前後の体高を有していると思われる。

足根骨、指骨については計測値だけを第9・10・11表に示しておく。

III まとめ

長野県佐久市の池畠遺跡から共伴して出土した9世紀頃の5頭分の馬歯と1頭分の牛歯・牛骨について記載した。馬歯は3個の上顎と2個の下顎に植立していたもので、それぞれの顎骨は別個体に属する。

1号馬—1才前後で性別不明。上顎の乳臼歯はほぼ同時代の群馬県の大久保A遺跡出土のものよりも現世のサラブレッドに近い形状を有しているが、大きさの点で後者よりだいぶ小さい。

2号馬—12才前後で、性別不明。現世中型在来馬ほどの大きさを有し、長野県野火付遺跡出土

の4号馬にはほぼ匹敵する大きさだったと推定される。左右の上顎第三臼歯の後小窓が遠心側へ開いている。

3号馬—10才前後で、性別不明。現世中型在来馬の御崎馬ほどの大きさを有し、当時の馬としては大きい方である。

4号馬—13~14才で、性別不明。朝鮮の濟州島馬に近い大きさで、日本の近世以前の馬としては小さい方である。

5号馬—15~18才で、性別不明。体高110cm弱のかなり小型の個体と推定される。

牛—性別不明の成獣である。後臼歯列長の大きさでは朝鮮牛に等しい。中足骨は幅が小さいのが特徴で、その大きさは現世黒毛和牛のメスに近く、本牛が125cm前後の体高であることを示している。歯は歯冠高のわりに歯冠幅が小さい。

おわりに、本稿をまとめたにあたり多数の方々にお世話を頂いた。木内捷氏をはじめとする長野県佐久埋蔵文化財調査センターの職員の皆様には本資料の調査の機会を与えていただき、出土資料について多くのご教示をえた上に、有益な討論をしていただいた。御代田町教育委員会の堤隆氏には、本資料についてのご紹介をいただき、古代の佐久市付近の馬事情についてご教示をえた。日本大学松戸歯学部の三島弘幸博士には比較標本を貸していただき、研究上のご助言を賜った。以上の方々には、ここで改めて深く御礼申し上げる次第です。

第1表 馬全臼歯列長計測値一覧表

(単位 mm)

標 本	時 代	上顎全臼歯列長	下顎全臼歯列長
泡 煙	1号馬 2号馬 3号馬 4号馬 5号馬	奈良～平安	166.0± 152.7 167.2 114.8
大久保A ⁵⁾	O A II 2号馬	平 安	169.4
	O A II 3号馬		173.0
十 三 宝 塚 ⁵⁾	〃		155.6
野 火 付 ⁸⁾	1号馬 2号馬 3号馬 4号馬	〃	161.0 165.5 163.0 166.2
下 佐 野 ¹⁰⁾	1号馬 2号馬	近世～近代	156.0 141.0
中 尾 ¹¹⁾ 馬	〃		146.0
木 曾 馬 ⁶⁾	最 大 最 小 平 均	現 世	184.0 162.5 173.2(N=6)
御 島 馬 ⁷⁾ 平均(N=8)	〃		163.8
ト カ ラ 馬 ⁹⁾	〃		167.2
济 州 島 馬 ⁶⁾	〃		157.0
			151.0
			154.0

第2表 馬臼齒計測値一覧表

(単位 mm)

時代	標 本	部 位	第2前臼齒	第3前臼齒	第4前臼齒	第1後臼齒	第2後臼齒	第3後臼齒
奈 良 ・ 平 安	1号馬 (上顎)	齒冠長幅	35.8	29.5		24.3	26.7	29.3
		齒冠幅	21.8	23.4		21.8	22.3	25.0
		齒冠高	33.6	36.7		79.7	59.6	36.7
	2号馬 (上顎)	齒冠長幅	28.0+	28.6	26.0	23.9	24.5	29.3
		齒冠幅		26.3	26.2	26.3	25.6	25.4
		齒冠高	16.5	29.3	38.4	32.3	40.2	36.7
	4号馬 (上顎)	齒冠長幅	34.0	27.1	24.2	21.2	22.2	25.4
		齒冠幅	22.7	24.7	25.4	25.3	23.1	20.5
		齒冠高	22.0	31.4	37.0	31.0	38.6	37.4
	3号馬 (下顎)	齒冠長幅	31.8	26.7	25.8	24.2	25.1	34.2
		齒冠幅	14.2	16.4	16.5	15.2	14.3	12.3
		齒冠高	24.8	29.3	38.7	33.7	44.9	37.3
	5号馬 (下顎)	齒冠長幅		23.3	22.2	20.8	20.5	28.0
		齒冠幅		14.0	13.4	13.2	12.1	11.4
		齒冠高		17.7	23.9	24.4	30.1	23.0
大 久 保 A 馬	5) OAII2号馬 (上顎)	齒冠長幅	38.8	28.3	27.3	24.5	26.1	30.6
		齒冠幅	24.5	27.4	27.0	26.4	25.2	23.3
	OAII2号馬 (下顎)	齒冠長幅	33.2	28.0	27.4	25.4	27.2	34.4
		齒冠幅	14.7	16.2	16.1	14.9	14.1	13.5
	OAII3溝 1号馬 (上顎)	齒冠長幅		26.4	25.6	21.8	25.4	22.1
		齒冠幅		25.0	25.8	23.0	22.3	24.0
	OAII3溝 1号馬 (下顎)	齒冠長幅	30.1	24.8	23.6	21.4	22.2	31.0
		齒冠幅						
	5) 十三宝齋馬	齒冠長幅	37.7	30.7	27.6	25.8	26.2	24.0
		齒冠幅	23.8	26.7	25.8	25.4	23.6	20.6
平 安	6) 1号馬 (下顎)	齒冠長幅	32.2	28.8	28.2	25.4	26.6	28.6
		齒冠幅	14.1	16.4	14.6	14.3	14.3	11.7
	7) 1号馬 (下顎)	齒冠長幅	31.4	26.0	24.0	21.7	22.2	31.7
		齒冠幅						
	8) 2号馬 (下顎)	齒冠長幅	33.7	28.8	26.2	26.0	26.2	28.6
		齒冠幅	15.0	17.7	16.5	15.7	13.5	12.5
	9) 3号馬 (下顎)	齒冠長幅	31.6	25.7	25.6	22.0	23.6	36.6
		齒冠幅	14.4	16.4	16.3	16.3	14.0	12.7
	平均 (下顎)	齒冠長幅	32.0	26.8	25.1	23.2	24.0	32.3
		齒冠幅	14.7	17.05	29.5	16.0	13.8	12.6
近 世 ・ 近 代	10) 下 佐 野 日 馬	齒冠長幅		27.6	25.0	26.3	24.4	29.7
		齒冠幅		16.1	15.2	13.8	14.4	13.1
	(上顎)	齒冠長幅	35.4	25.0	24.7	20.4	23.2	33.0
		齒冠幅	22.5	25.0	25.3	21.8	18.9	21.9
	(下顎)	齒冠長幅	34.6	23.6	23.5	21.8	22.0	30.6
		齒冠幅	20.9	17.9	14.3	13.5	11.7	12.6
	11) 中尾馬	齒冠長幅	32.8	23.8	23.0		20.4	31.0
		齒冠幅	20.4	22.3	24.8		24.2	23.1
現 世 在 來 馬	7) (下顎)	齒冠長幅	30.7	22.6	22.6	21.5	21.5	30.1
		齒冠幅						
	8) (下顎)	齒冠長幅	33.0	32.0	31.0	26.0	31.0	
		齒冠幅	14.0	17.0	16.0	15.0	14.0	

齒冠幅はエナメル幅

第3表 馬乳臼歯計測値一覧表

(単位 mm)

	池畠1号馬(奈良~平安)	大久保A(平安)			ナラブレッド(現世)						
		歯冠長	歯冠幅	粗率	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	粗率	歯冠高		
第2乳臼歯	12.0										
第3乳臼歯	27.7	22.4	80.9	13.0	30.4	20.4	67.1	29.8	24.0	80.5	13.0
第4乳臼歯	28.2	22.4	79.4	19.4	32.1	19.4	60.4	30.0	24.0	80.0	13.8

第4表 馬切歯計測値一覧表

(単位 mm)

	池畠1号馬			ナラブレッド(現世)		
	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
左 第1切歯	18.1	10.4	35.6			
右 第1切歯	18.9	10.3	36.5	20.7	12.1	
右 第2切歯	16.3	8.7	16.4	17.6	9.0	

第5表 家牛全臼歯列長計測値一覧表

(単位 mm)

	池畠牛	長岡弥生牛 ¹⁷⁾	朝鮮牛 ¹⁸⁾	九州牛 ¹⁹⁾
上顎全臼歯列長	132.0			
上顎前臼歯列長	47.7(+?)		51.0	48.0
上顎後臼歯列長	82.1		82.0	80.0
下顎全臼歯列長	138.3	137.2		
下顎前臼歯列長	50.5	49.8		
下顎後臼歯列長	87.7	87.4		

第6表 家牛臼歯計測値一覧表

() 内は最大部分

時代	標本	第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯	
奈良 平安	池畠	歯冠長 上顎 下顎	13.4+ 13.1 10.4+ 9.1 22.0 17.4	17.4 20.7 14.4+ 10.0 25.7 20.4	17.8 20.3 19.4 10.9 29.2 23.2(L.)	26.0 24.0 14.8 14.6 26.4 24.5	29.6 27.1 25.2 14.6 38.4 28.4	27.8 38.2 17.6 14.8 45.0 23.1
		歯冠幅 上顎 下顎	10.4+ 11.4 8.4 13.2	11.2 11.7 12.1 19.3	10.8 11.7 12.1 20.2	21.8 15.8 16.9 19.5	23.3 26.2 27.7 27.7	38.1 17.8 27.8
		歯冠高 上顎 下顎	17.4 10.8 8.4 13.2	17.4 10.8 8.4 13.2	17.4 10.8 8.4 13.2	17.4 10.8 8.4 13.2	28.9 31.0 14.8 41.5	
古墳	大坂山古墳 ²⁰⁾	歯冠長 上顎 下顎						
		歯冠幅 上顎 下顎						
		歯冠高 上顎 下顎						
土師?	長野平出 ²¹⁾	歯冠長 上顎 下顎						
		歯冠幅 上顎 下顎						
		歯冠高 上顎 下顎						

第7表 家牛下顎骨計測値一覧表

(単位 mm)

	標本	歯隙中央	第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
下顎体高	池 烟 (奈良~平安)	25.0	35.0	39.2	42.0 (Li)	45.6 (Li)	51.6 (Li)
	静岡長岡 ¹⁷⁾ (弥生)	28.0	45.5	49.8	52.5	59.0	62.4
	埼玉皆野 ¹⁷⁾ (土師)	18.5+	25.0+	34.0+	44.0+	51.5+	59.0
下顎体厚	池 烟 (R)	12.6	16.7 (R)	19.2 (R)	21.5 (L)	24.8 (L)	26.1 (L)
	静岡長岡 ¹⁷⁾	16.8	22.3	23.4	26.8	28.0	29.2
	埼玉皆野 ¹⁷⁾	12.6	16.4-	19.0	22.5	24.8	24.5

第8表 家牛中足骨計測値一覧表

(単位 mm)

部 位	奈良~平安 池 烟	現世 ¹⁹⁾				
		見島牛			現代黒毛和牛	
		No.1	No.2	No.3	♂(N=5)	♀(N=5)
1 敷大長	223.7	197.0	208.0	213.0	232.2	222.1
2 外側の長さ	213.8	195.0	205.0	210.0	224.4	216.4
3 骨軸長	219.7					
4 内側の長さ	209.4	192.0	201.0	207.0	220.2	213.2
7 遠位端矢状幅の長さ	20.9					
8 滑車間隙の長さ	20.0					
9 近位端の最大幅	43.0	43.0	42.0	47.0	60.0	50.9
10 近位端関節面の最大幅	43.0					
11 骨体の最小幅	25.1	24.0	22.0	22.5	32.0	25.6
12 遠位端の最小幅	47.3	47.0	46.0	46.0	59.4	50.4
13 骨体遠位端の最大幅	51.5	48.0	46.0	46.0	61.4	51.2
14 遠位端の最大幅	51.6					
15 遠位端関節面の最大幅	51.6	49.0	51.0	50.0	63.6	54.3
	23.0	23.0	24.0	24.0	29.2	25.4
16 滑車遠位端の最大幅	23.4	22.0	23.0	22.0	29.0	24.8
17 内側関節面の幅	25.7					
18 近位骨端の径	43.1	42.0	37.0	39.0	56.8	47.3
19 近位関節面の最大径	40.8					
20 骨体の最小径	23.9	23.0	23.0	23.0	29.7	26.2
21 骨体遠位端の径	29.3	27.0	28.0	26.0	35.9	31.3
22 遠位端の最小径	28.3	25.0	26.0	25.0	31.7	27.7
23 遠位端関節面の最大径	31.1	28.0	29±	30.0	39.0	32.8
24 内側関節面の径	23.0	22.0	22.0	22.0	27.8	23.1
25 滑車の矢状径	29.8					
骨体最小幅 ¹⁹⁾ ×100 最大長(I)	11.22	12.18	10.58	10.56	13.78	11.53

第9表 家牛踵骨計測値一覧表 (単位 mm)

	部 位	計 測 値
1	全長	130.0
3	踵骨体長	95.3
4	載距突起関節面長	30.0
5	踵骨隆起幅	29.7
6	最大幅	39.8
7	最小幅	15.4
8	前突起幅	16.5
9	踵骨隆起径	35.5
10	踵骨最大径	39.0
12	立方骨関節面長	34.6
13	立方骨関節面幅	19.3
15	後距骨関節面長	28.4
16	後距骨関節面幅	30.3

第10表 家牛膝節骨計測値一覧表 (単位 mm)

	部 位	計 測 値
1	外側長	57.5
2	内側長	55.6
3	矢状長	50.3
4	近位端最大幅	27.1
5	近位関節面内側幅	11.1
6	骨体最小幅	22.0
7	骨体遠位最大幅	24.0
8	遠位関節面最大幅	25.3
9	遠位関節面内側幅	10.3
10	近位骨塊最大径	32.4
12	骨体最小幅部の径	23.8
13	骨体最小径	17.9
14	遠位関節面内側径	19.8
15	遠位関節面外側径	18.0

第11表 家牛距骨計測値一覧表 (単位 mm)

	部 位	計 測 値
1	外側滑車長	60.8+(2±)
2	内側滑車長	56.8+(1±)
3	滑車最大長	35.4
4	滑車溝長	14.8
5	近位部幅	44.3
6	距骨最大幅	44.3
7	遠位関節端の幅	41.2
8	距骨体最小幅	37.6
9	滑車最大対角線長	51.6+
10	距骨径	35.6
13	外側踵骨関節面長	9.9
14	外側踵骨関節最大幅	27.1
15	中踵骨関節面長	39.5
16	中踵骨関節面最大幅	30.1

引用文献

- 1) 直島信夫 1984 「日本馬の考古学的研究」校倉書房
- 2) 家畜解剖学分科会 1978 「家畜解剖学用語」日本中央競馬会弘済会
- 3) Duerst,J.U 1926 「Vergleichende Untersuchungs-Methoden am Skelett bei Säugetieren (Methoden der Vergleichenden morphologischen Forschung)」 Handbuch der biologischen Arbeitsmethoden 7.2,PP125-530
- 4) 長谷川善と・原田俊治 1979 「馬と進化」(Simpson,G.G 1951 「Horses」 Oxford University Press, New York
- 5) 群馬県吉岡村教育委員会 1985 投稿中
- 6) 同部利雄 1953 「木曾馬について—日本在来馬に関する研究」日本学術振興会、P P 75-162
- 7) 斎藤勇夫・黒木正雄・村上隆之 1972 「御崎馬の死亡調査と追骨の測定—第3報、骨の測定値について」宮崎大学農

- 8) 宮崎重雄 1985 「野火付道路出土の馬骨について」 野火付遺跡、御代田町教育委員会
- 9) 林田章幸・鈴木孝司 1974 「川入遺跡出土の馬骨について」 関山県埋蔵文化財調査報告書・2集 P P354-367
- 10) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 「下佐野遺跡-II地区I」(撰文時代・古墳時代編)
- 11) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 「中尾」(遺物篇)
1984 「中尾」(遺物篇)
- 12) Mason,J.L 1984 「Evolution of domesticated animals」 Longman,London
- 13) 国分直一・木村伸義 1983 「家畜の歴史」(Zeuner,F.E 1963 「A History of Domesticated Animals」 Hutchinson, London)
- 14) 野沢謙・西田隆雄 1970 「日本とその周辺地域の在来家畜の由来」 科学40巻1号 P P29-30
- 15) 市川健夫 1981 「日本の馬と牛」 東京書籍
- 16) 鍋方貞亮 1982 「日本古代家畜史」有明書房
- 17) 直良信夫 1973 「古代遺跡発掘の家畜遺体」 校倉書房
- 18) 芝田清吾 1969 「日本古代家畜史の研究」 学術書出版会
- 19) 仙波輝彦 1960 「長崎県壱岐島中期及び後期弥生式時代遺跡出土哺乳動物骨の研究」 人類学研究7巻1~2号
P P190-227

後記

今回、佐久建設事務所が行う県道香坂・中込線バイパス改良工事事業（高速道路関連工事専用道路）が池畠・西御堂両遺跡を通過する計画がなされ、これに伴なう緊急発掘調査を行うことになりました。

本調査において、調査団の編成から調査各段階において御配慮をいただいた、佐久市教育委員会・地元安原区の区長谷津延氏・堀篠常人氏はじめ区民の皆様方の深い御理解と御援助によって調査を充実したものにすることが出来たことを心から御礼申しあげます。又、年の瀬も迫る11・12月と多忙のなかを、現地調査に、続いて整理調査に参加してくださった協力者の皆様の熱意と並びに歎骨鑑定をお願いした、群馬県立前橋第二高等学校教諭宮崎重雄先生の御指導と御協力により、ここに報告書を発行できることを改めて感謝の意を表す次第です。

安原を中心とする湯川左岸の此の台地には、埋蔵文化財の分布が多く、重要な遺跡地帯です。

本調査は、池畠・西御堂両遺跡のはんの一部分であり、調査対象面積も小さかったために、検出遺構は池畠遺跡で、堅穴住居址2棟・土坑1基・溝状遺構2基。西御堂遺跡では、土坑2基でしたが、出土遺物として、弥生時代終末期から古墳時代初頭ではないかと思われる、佐久地方に於て、今までにその類例を見ない貴重な土器等の検出を、又、家畜化した古代の馬の頭骨並びに牛の骨等の検出を見ました。これらの土器は、弥生時代終末期から古墳時代にかけての土器の編年に大きな課題を与えられた事を認識し、さらに、歎骨の検出に於ては、地域に於ける原始・古代の生活、特に埋葬と風習等の研究と解明の責任を感じました。その意味からも今後、更に各位の御指導を賜わり、本報告書を総合研究調査の足掛りとしたい所存です。

（黒岩）



高知遺跡群・猪俣遺跡群付近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影 C 6-11）



1. 池畠遺跡遠景（西方より）



2. 池畠遺跡より平尾山を望む（南方より）



1. 第1号住居址（南方より）



2. 第1号住居址遺址（南方より）



3. 第1号住居址遺物出土状況（北方より）



4. 第1号住居址遺物出土状況（南方より）



5. 第1号住居址遺物出土状況（北方より）



1. 第2号住居址（南方より）



2. 第2号住居址遺物出土状況（南方より）



3. 第2号住居址遺物出土状況（東方より）



4. 第2号住居址遺物出土状況（東方より）



5. 第2号住居址遺物出土状況（南方より）



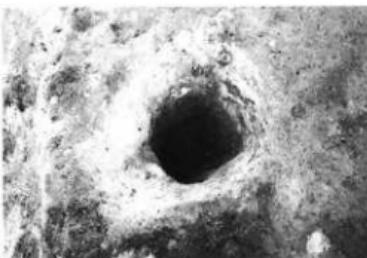
1. 第2号住居址遺物出土状況（北方より）



2. 第2号住居址遺物出土状況（東方より）



3. 第2号住居址断面（北方より）



4. 第2号住居址（南方より）



5. 第2号住居址（南方より）



1. 第1・2号住居址（東方より）



2. 第1号溝状遺構（南方より）



3. 第2号溝状遺構（東方より）



1. 第1号土坑牛馬骨出土状況（南方より）



2. 第1号土坑牛馬骨出土状況（南方より）



1. 第1号土坑遺物出土状況（北方より）



2. 第1号土坑遺物出土状況（南方より）



3. 第1号土坑遺物出土状況（東方より）



4. 第1号土坑遺物出土状況（東方より）



5. 第1号土坑（西方より）



1. 池畠遺跡全景（東方より）



2. 池畠遺跡全景（西方より）



1. 西御堂遺跡遠景（東方より）



2. 西御堂遺跡全景（東方より）



3. 第1号土坑（東方より）



4. 第2号土坑（東方より）



1. 第1号住居址出土土器



12-2

2. 第1号住居址出土土器

12-1



12-4

4. 第1号住居址出土土器

12-3

3. 第1号住居址出土土器



12-5

5. 第1号住居址出土土器



12-6

6. 第1号住居址出土土器



15-1

7. 第1·2号住居址出土瓷形土器



20-1

1. 第2号住居址出土土器



20-2

2. 第2号住居址出土土器



20-2a

1. 第 2 号住居址出土土器



20-4

4. 第 2 号住居址出土土器



20-2b

2. 第 2 号住居址出土土器



21-6

5. 第 2 号住居址出土土器



20-5

3. 第 2 号住居址出土土器



21-7

6. 第 2 号住居址出土土器



21-8

1. 第 2 号住居址出土土器



21-12

5. 第 2 号住居址出土土器



21-9

2. 第 2 号住居址出土土器



21-13

6. 第 2 号住居址出土土器



21-10

3. 第 2 号住居址出土土器



21-14

21-11

4. 第 2 号住居址出土土器



7. 第 2 号住居址出土土器



26-1

1. 第1号土坑出土土器



26-3

2. 第1号土坑出土土器



26-4

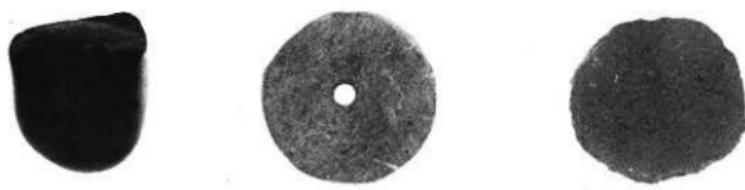
3. 第1号土坑出土土器



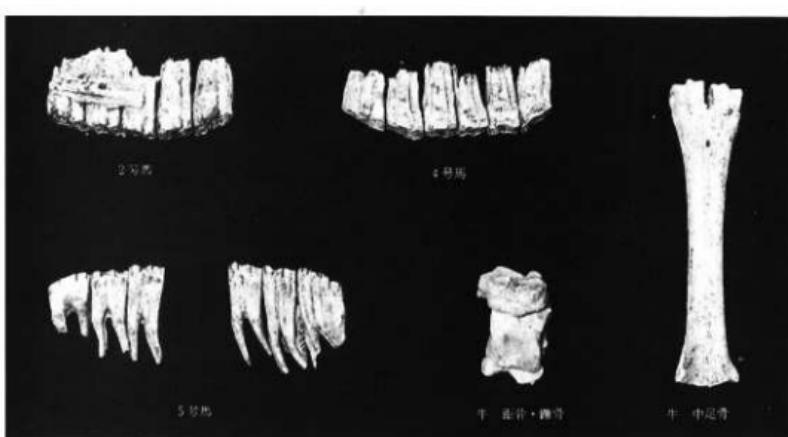
1. 第 1 号土坑出土石器



2. 第 1 号住居址出土石器



3. 第 2 号住居址出土石器・土製品



4. 第 1 号土坑出土牛骨

長野県佐久市

筒 烟 遺 跡 群 池 烟 遺 跡

猫 久 保 遺 跡 群 西 御 堂 遺 跡

1986年3月31日

編 集 者 佐久埋蔵文化財調査センター

発 行 者 長野県佐久市教育委員会

印 刷 所 株式会社 佐久印刷所